
スマイルプロジェクト ～その笑顔、国家機密につき～

沙φ亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマイルプロジェクト ～その笑顔、国家機密につき～

【Nコード】

N3342Y

【作者名】

沙φ亜竜

【あらすじ】

ほのかへあつき

さわこみなも

炎壁熱希と沢湖水萌は親友だ。熱希は水萌を大切に思っている。

熱希はある日、水萌を狙う影に気づく。仲間たちと協力し捕らえることに成功したが、彼らはストーカーなどではなかった。

幼い頃に投与された薬によって、水萌は強力な爆弾と化していた。彼女を爆発から守る国家機密組織スマイルプロジェクト、それが彼らだった。

リーダーのアマサギが言うには、水萌は悲しみや苦しみといった負の感情の蓄積によって爆発してしまうらしい。逆に笑っていれば、

爆発の危険性は抑えられる。

熱希たちは水萌が爆弾だとわかってても、友人として今までどおり接する。そんな中、さらなる怪しい連中が水萌の周りをうろついていることを知る――。

「うううゝ……。ぐすっ」

少女が泣いていた。

あたしの大切な少女が。

「ほらほら、こっちだよ！ほんと、トロいな、おまえゝ！」
「うえゝん、かえして、かえしてよおゝ……」

男の子が少女の物と思われる、ピンク色の巾着袋を高々と掲げていた。

それに飛びつこうと必死にジャンプする少女。その動きは男の子の言葉どおり、トロい。

男の子が動かす手の動きにもまったくついていけない。
それでも必死にジャンプする少女の手が、どうにか巾着袋に届く
うとする瞬間、

「ほい、パス！」

男の子は手にしたそれを、他の男の子に投げる。

でも、女の子は必死にジャンプしていたため、勢い余ってその男の子に体当たりする形になった。

「うわっ、いて！こいつ、ほんとトロいな！」
「ううううゝ……」

少女はそのまま膝から地面に倒れ込んだ。

どうにか身を起こした少女は、地面ですりむいたのか膝を抱えながら、男の子たちに涙目を向ける。

「ううゝ、かえしてよぉゝ、私のたからものぉゝ……」

膝をすりむいてケガをしたかもしれないと、ちょっと心配そうな様子を見せていた男の子だったけど、少女の言葉に反応してさらに声を上げた。

「これが、宝物ぉゝ？ あははは！ おい、その中になが入ってるか、開けてみるよ！」

「OK！」

巾着袋を持っていた男の子が、その紐に指をかける。

「や……やめてよぉ……！ あけないでよぉゝ……」

必死に懇願する少女。紐は固く結ばれていて、なかなか開かないようだった。

「やだやだやだ、あけちゃ、だめえ……！ うえゝゝゝん、ぐすっ」

少女は立ち上がる気力もなくなったのか、近くにいた方の男の子にすがりつきながら泣いている。

「うわっ、くつつくなよ！ 鼻水がつくだろ！」

男の子は身をよじるものの、少女を振りほどくことはできなかった。

初夏で少し暑いからか、男の子がちょっと赤くなっていた。
もっとも、暑いからという理由だけじゃないのだろうけど。

ともかくそんな場面に、あたしは現れた。

一緒に帰ろうと約束していたにもかかわらず教室にいなかった彼女を探していたのだ。

「おいこら、あんたたち！ 水萌^{みなも}に、なにしてんのよぉ～～～！」

まさに鬼の形相といった感じであたしが怒鳴ると、

「うぁ！ 鬼ババが来た！ 逃げろ～～～～！」

男の子たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ去っていった。

残ったのは、まだ倒れたまま、ひつくひつくと嗚咽を漏らしている少女と、鬼の形相のままのあたしだけだった。

「水萌！ 大丈夫？」

あたしは少女に駆け寄る。

「ひつくひつく、熱希^{あつき}ちゃん、顔、怖いよぉ……ひつく」

ぐしゃぐしゃな泣き顔をさらしながらそんなことを言う水萌。

てか、あんた。そんな言い方をしたら、あたしが泣かしてるみたいじゃないか！

なんて考えていると、案の定というか、クラスメイトが通りかかってしまった。

「おおぅ！？ 熱希ちゃんが水萌ちゃんを泣かしてる！？ これは

由々しき事態なのだっ！」

……なんでよりもよって、この子が現れるのだから。

この子はフーミン。というと、文子とか史奈とかいった名前を連想するかもしれないけど。この子の名前はそのまま、ふうみん風民という。すすしろふうみん涼城風民、クラスメイトの中でも随一のお喋りな女の子だった。

自ら「フーミンって呼んでほしいのだ。」と言っていたのだけど、名前のほうを、しかも呼び捨てにしていることなのだから、考えてみると結構すごいことなのかもしれない。

それにしてもこの子の喋り方は、聞いていてちよつと疲れる。

「フーミン！ 違うってば！ それよりなんで、こんなところに来るのよ！？」

「それはこっちのセリフなのだ。こんな人気がひとけのないところに水萌ちゃんを呼び出して、なにしてたのだ！？」

人気がない場所。うん、確かにそうだ。

ここは中庭。だけど、校庭に出るためにも、校門に向かうためにも、体育館に行くためにも通らない。

花壇があるから世話をしに美化委員が通りかかったりはするかもしれないけど、それ以外の人通りはほとんどない場所だったのだ。

花壇には背丈の高い花も植えられていて、職員室や人の多い教室に近い廊下からは死角となっている。

つまり、あの男の子たちはそれを考慮してこの場所で水萌をいじめていたのだ。

なんて計画的で卑劣な奴らなんだろう。

とはいえ、男子が水萌をいじめるのも、わからなくはない。

だって水萌ってば、こんなに可愛いんだもん。

男の子って好きな女の子をいじめて自分の存在をアピールするよ
うなところがある。

そんなことをしても絶対嫌われるだけだと思うし、ほんとバカだ
なっと思ってけど。

さっきの男子はきっと、水萌が気になって仕方がないのだろう。
だからといって、いじめていいなんてわけはない。現に水萌は泣
いている。それだけでも充分に罪なのだ。

と、そんなことを熱く考えている場合ではなかった。

「まあ、水萌ちゃんと熱希ちゃんが仲たがいするなんて、考えられ
ないとは思っただけでも……」

目の前ではフーミンが、そうつぶやきながらも状況を把握しよう
としているのか、あたしと水萌へ交互に視線を向けていた。

あたしは水萌を見る。

彼女はまだ泣いていたけど、少しは落ち着いてきているみたいだ。

それでもまだ、ひつくひつくと鼻を鳴らしているのだから、自分
で状況説明ができるはずもなく。

かといって、いじめられていたと正直に話してしまうのもどうか
と思った。

べつに男子を庇うためじゃない。

告げ口したと、さらに水萌がいじめられるかもしれない、そっ
う可能性を考えたのだ。

このときのあたしは小学校三年生だったはずだけど、案外冷静に
考えていたようだ。

「えっと、それは……」

どうしようかな、と思考を巡らせる。そうだ。水萌、さっき膝をすりむいてたわ。

「あたしたちふたりで、花壇の花を見に来てたのよ。でもさ、水萌ってばトロいから、転んじやって膝をすりむいたの。んで、泣いちゃって……。見たところ、そこまでひどいケガじゃなさそうなのね」

「……ほんと、ケガしてるのだ。水萌ちゃん、大丈夫？ 保険室行く？」

基本的に素直なフーミン、あたしの言葉にまったく疑いを持つたりはしなかった。

実際に目の前ですりむいた膝を抱えた水萌が座り込んでいるのだから、疑いようもないのかもしれないけど。

フーミンはクラスメイトの中でも、結構仲のいい子ではあった。だからべつに本当のことを言ってもよかったのかもしれないのだけど。

水萌もあたしに視線を向けて、どうしてそんな嘘をつくのお？なんて目で訴えているみたいだった。

あたしはほのかに笑顔を浮かべて軽く頷き返す。

あたしに任せてよ。いつもどおりに、ね。

「こんなの、ツバつけとけば治るよ！ 水萌ってば、ほんとに大げさなんだから。さてと、それじゃ、あたしたちは帰るから。カバン取りに教室に戻らないと。フーミン、じゃあねっ！」

まだ涙を両目に溜めたままの水萌を無理矢理抱え上げるように立

たせると、彼女の腕を引っ張りながら、あたしはその場をあとにした。

「愛の逃避行なのだな！？ さすが仲よしこよしさんは違うのだ！」

なにやらわけのわからない歓喜の声のようなものが背後から聞こえた気がしたけど、それはまあ、無視ってことで。

「熱希ちゃん、ごめんねえ」

昇降口まで走ったところで立ち止まって息を整えていると、水萌がそう言葉を発した。

「なんで謝るのよ」

「だってえ、いつも私、熱希ちゃんに迷惑ばかりかけて……」

うるうるうる。

やっと泣き止んだのに、また涙が溢れそうになっている。

「もう、迷惑じゃないってば。大丈夫だよ。水萌はあたしが護るから」

「う、うん……」

恥ずかしそうに顔を伏せる水萌。言っているこっちだって恥ずかしかったのだけど。

でも、

「あの、熱希ちゃん……。男の子たちから助けてくれて、ほんと、ありがとう」

にこおっつ。

ふと伏せていた顔を上げ、水萌はあたしに明るい笑顔を向けてくれる。

まだ涙の残った瞳がキラキラと輝いて、背景には無数のお花が咲き乱れているかのような錯覚さえ起こさせる。

ん、もう、可愛いつたらないわ！ 思わず抱きしめたくなくなっちゃう！

あたしは水萌を、このまぶしいほどの笑顔を絶対に護る。そう心に誓っていた。

ようやく微笑んでくれた水萌に、拾って持ってきたあったピンク色の巾着袋をそつと手渡す。

巾着袋には、油性ペンで「さわこみなも」としつかり彼女名前が書いてあった。

この袋の中にはお守りが入っているというのを、あたしは知っている。大切な思い出のお守りなのだそうだ。

そんなに大事なら、家に置いておけばいいのに。

それはともかく、あたしは今日もこうして水萌を護れたことに満足していた。

その一ヶ月ちよつと前。あたしがこの町に引っ越してきたときのことだ。

クラスメイトが微妙にクラスに馴染んだ頃と思われる五月に、あたしはこの学校に転校してきた。

父親の転勤の都合だし、それは仕方がなかったのだけど。

あたしは学校に通い始めて数日経つても、クラスに溶け込めずにいた。

休み時間のたびに、ひとりぼっちで席に座っているあたし。周り

ではクラスメイトの楽しそうな声が響く。

転入生というのは質問攻めに合ったりとかして、いつの間にかクラスに溶け込めていたりするものと、勝手に思い込んでいた。だけど、タイミングとか周りにどんな人がいるかによっては、そうならない場合だってあるのだ。

今のあたしからは考えられないことだけど、この頃のあたしは物静かでおとなしい女の子だった。自分から進んでクラスメイトの輪の中に飛び込んでいけるほどの勇気なんて、持ち合わせていなかった。

クラスメイトもあたしのことが気にはなっていたのだろう。たまにチラチラと視線を向けては、ヒソヒソと話す声は聞こえた。

でも、話しかけてくれる子はいなかった。

そんな状況が続けば周りの認識も固まってしまう。

あたしという存在はクラスの中で、話しかけづらい転入生として確固たる地位を築き上げてしまっていた。

そしてあたしのほうも、その状況を嫌々ながらも受け入れ、諦めていたのだろう。

もういいや。このまま静かにしていよう。そんなふうに、ある意味いじけた考えに染まりきっていた。

こんなとき、担任の先生や学級委員が気を遣ってくれるといいのだけ。

単におとなしいだけの女の子。いじめられているわけではないかなのか、まだ日が浅いから様子を見ているだけなのか。

このときのあたしには、誰も手を差し伸べてはくれなかった。

ただひとり、彼女を除いて。

「炎壁^{ほのかへ}ちゃん！」

明るい笑顔を振りまいて声をかけてくれた女の子。それが水萌だった。

炎壁というのはあたしの名字。

その名字が示すとおりなのか、知らないうちにクラスメイトのあいだに壁を作ってしまったあたしに向かって、彼女は話しかけてくれた。

「すごく激しい感じの名字だねえ。めらめら。下の名前は熱希^{あつき}ちゃん、だっけ？ 炎で熱い、すごい名前！」

コロコロと笑いながら楽しそうに話しかけてくる。

熱そうな名前とは、昔からよく言われていた。怒ると我を忘れてしまうのは、あたし自身でも充分に自覚している。

だけど、彼女の感想は、そうじゃなかった。

「すごく温かい名前だねえ。熱希ちゃんらしい、いい名前だと思うよ。」

にこおっつ。

輝くような水萌の笑顔に、あたしは恥ずかしながら、天使さんが微笑んでくれてる、なぐんて思ったものだ。

「私は沢湖水萌^{さわこみなも}。よろしくねえ！」

ちよつとのんびりした口調で、笑顔を絶やさずに手を伸ばしてくる水萌。

あたしの手をぎゅっと握った彼女の温もりが、冷えきっていたあ

たしの心をも優しく包み込んでくれた。

もちろん、クラスに馴染めていなかったあたしに対する同情はあっただろう。

でもそれから、水萌は休み時間のたびにあたしの席にまでやってきては、いろいろと話かけてくれるようになった。

あたしのほうも少しずつだけど水萌に心を許し、いろいろとお話できるくらいにまでは仲よくなっていた。

そうになると、クラスの他の子からも少しずつだけど話しかけてもらえるようになって、あたしのほうからも声をかけてみたりもして一ヶ月も経てば、すっかりクラスの一員となっていた。

それもこれもみんな水萌のおかげ。ほんとに感謝してもしきれない思いだった。

ところでそのうち気がづいたのだけど、どうも水萌はクラスの中で少しばかり浮いている存在だった。

正確には、からかわれる傾向にあるといった感じなのだけど。

少々のおんびり、というかなんトリロい彼女。しかもすごく可愛いのだ、なんとなくわかる気はする。

きつと水萌の反応を見て楽しんでるだけで、いじめとかそういうレベルではないのだろう。

ただ、たまに巾着袋を取り上げられたときのような、ちょっと悪質なからかい行為、いじめと言われても仕方がないと思うくらいにまでエスカレートすることがあった。

すぐ泣く水萌も悪いと言えなくもないのだけど、でもどちらが悪いかといったら、考えるまでもなく相手のほうだ。

だからあたしは、水萌が泣いたりしないように護ってあげようと

心に決めていた。

水萌のあの明るい笑顔が見たいから。

水萌にはいつでも笑顔でいてほしいから。

あれからもう八年。

あたし、ほのかへあつき炎壁熱希は高校二年生になっていた。

県立の共学校で、レベルとしては中の上くらいだろうか、ぎりぎり進学校と呼ばれるか呼ばれないか微妙なラインである林原北高校に通っている。

「おはよう〜！」

教室に入ると仲のよいクラスメイトと軽く挨拶を交わしつつ、自分の席に着く。

「あつ、おはよう〜、熱希ちゃん」

優しい笑顔を向けて挨拶してくれたのは、大切な親友である沢湖さわこ
水萌。みなも

彼女はあたしのひとつ前の席に座っていた。

「ん、おはよう〜！ 今日笑顔全開ね！」

「うふふっ」

あたしと水萌は、小学校三年生で一緒になって以来、ずっと同じクラスが続いている。

彼女を護ると誓いを立てたあたしとしては、とても嬉しいことだった。いつときたりとも水萌と離れていたくない、そう思っているのだから。

水萌と同じ高校を受験したのも、その思いからだった。あたしに

はちょっとレベルが高い高校ではあったけど、水萌と一緒にいたい一心で頑張ったのだ。

でも同じ高校に入れたとはいえ、クラス分けなんて、いくら望んだって思いどおりになるものじゃない。それなのに、一年も二年も同じクラスになれた。

だからこれは運命なんだ、神様があたしと水萌の仲を取り持ってくれているのだ、とまで思っていたりする。

「キミたちは、相変わらず仲がいいのだ。もう、ラブラブって感じなのだ」

不意に後ろの席から声がかかる。

この変な喋り方。さすがにもう慣れたけど、彼女も小三すずしろみづみんのときからずっと一緒のクラスの腐れ縁、フーミンこと涼城風民すずしろふうみんだった。

ああ神様。どうしてこの子までずっと一緒なの？

「誰もふたりのあいだに割って入ることはできない、って感じだな。でも、暑苦しいからあまりイチャイチャしないでほしいけど」

さらにあたしの隣の席からも声がかかる。

こいつは土柳草砂どしろくさや。

ほんつとに嫌な運命だと思うのだけど、この男も小三からずっと一緒のクラスだった。

水萌をよくいじめていた男の子たちのリーダー格だった奴だ。

神様って意地悪だ。こいつまで一緒だなんて。拷問かなにかですか？

とはいえ、さすがに今でも水萌をいじているなんてことはない。

高校生にもなったのだから、当たり前だけど。

だいたいあの頃だって、気になる女の子にちょっかいを出してか
らかっているだけだったんだろうし。

でもそれは、あたしにとっては無視できないこと。

おそらくこいつは当事、水萌のことが好きだったはずだ。

今でもその想いが続いているのかはわからないけど、事あること
に水萌に話しかけようとしている気はする。だから、油断のならな
い奴なのだ。

そう思っではいるのだけど、なぜか以上四名、いつも一緒にいる
ことが多い。

有名な仲よし四人組などと言われてもいる。

その中でもとくにあたしと水萌は、女同士だけど友達以上の関係
と噂されるほどの仲のよさと評判。

若干、呆れられている感もあったりするけど、そこはそれ。べつ
にあたしは気にしない。

もちろん水萌も、いつもながらのほんわか笑顔で、気にするはず
がなかった。

おとなしめでいつも笑顔の水萌。でも、ちょっと抜けてるとい
うのか、ずれてるといふのか、いわゆる天然ってやつなのだろう。

あたしですら、水萌の会話の展開にはついていけないことがあ
った。

それでもあたしにとって、水萌は唯一無二の親友なのだ。

それなのに、どうしてもいつも四人ひとまとめで見られるのか。ち
よっと納得のいかない部分もありつつ、それでも安穩と楽しい高校
生活を送っているのだった。

「イチヤイチヤなんて言うな！ 親友同士の神聖なる友情を汚すような言い方をするんじゃない！」

あまり気にはしてなかったものの、土柳に言われるとなんだか無性に腹が立つ。

あたしは、いつもどおりの鬼の形相で言い返した。
なぜかこいつに話しかけるときは、そんな怒りの表情が多い気がする。ま、これも運命だと思って諦めてもらおう。

「うぐぐ……。鬼ババめ……。！」

「鬼ババ言っな！」

「ひい！」

土柳は今でもあたしを鬼ババ呼ばわりすることがある。こんな表情で凄んでいるのだから、自業自得と言えなくもないけど。

でも、さすがにそんな言い方をされては、気分のいいものではない。

さらに怖い形相を作り出して怒鳴るあたしに、怯えた真っ青な顔になって悲鳴を上げる土柳だった。案外、根性のない奴なのだ、こいつは。

と、そんな様子を、ほのかな笑顔を浮かべて眺めている水萌に気づく。

「水萌！ なにニヤニヤしてるのよ！？」

「うふふ、熱希ちゃんと土柳くんって、ほんとに仲がいいなあ。って思っ
て見てたのお」

にっこにっこ。

そんな嬉しそつに変なことを言わないでよね！

「あのねえ、いったいどこをどう見たら、仲よく見えるのよ！？」
「そうだそうだ、こんな鬼ババなんかと仲よくできるわけが……」
「なんか言った！？」

ギロリッ！ 再びの鬼ババ呼ばわりに、睨みを利かすあたし。

「ひいゝ！」

土柳はもちろん、また悲鳴を上げて縮こまった。

「きゃははっ！ 完璧に、息ピッタリの夫婦漫才にしか見えないのだ！」

「フーミン、あんたまで！ 殴るよっ！？」

「ぎゃゝ！ もう殴ってるのだ！ 暴力反対ゝ！」

「ふふふ」

今日も教室内には、主にあたしたち四人のじゃれ合う声が大きく響いていた。

いつもどおりの一日が終わり、放課後になった。

部活に入っていないあたしたちは、通学路をだらだらとお喋りしながら歩いていた。

「しかし、梅雨明け前だったのに、暑いわねえ」

制服の裾をパタパタと揺らして風を送り込みながら、あたしはぼやく。

「熱希ちゃん、はしたないよぉ。おへそ見えちゃってるぅ」

すかさず注意してくる水萌。

自分だってぼーっとして、はしたない格好をしていることがあるくせに、他人のそういう格好には敏感に反応するのだ、この子は。

「むゝ、でも暑いし。アイスでも買っていけない？」

「そうだねゝ、そうしょつか」

「きやははっ！ それがいいのだ」

「うん、まあ、異論はない」

あたしとしては水萌とふたりで歩きたいのに、いつもいつもフーミンと土柳も一緒だった。

帰る方向が同じで、みんな帰宅部なのだから当然の流れとも言えるのだけ。

それはともかく、今はアイスだ。

あたしたちはコンビニでソフトクリームを買って、食べながら歩く。

これだっではしたないだろうに、今度は水萌もなにも言わない。涼しい顔をしていたけど、やっぱり彼女も暑かったのだろう。

とはいえ、さすがに人通りもそれなりにある通学路。このまま歩きながら食べていたら迷惑だろうと、近くの公園へと足を運ぶことになった。

誰かの家まで行ってクーラーで涼みながら、なんて贅沢ができれば一番いいのだけど、四人とも家にクーラーがなかった。

まったく、使えない奴らだ。

もちろん自分のことは棚の上にポイ。

「熱希ちゃんのそれって、オレンジ味？」

「え？ 違うよ。マンゴー味、最近よく見かけるじゃん。水萌、食べてみる？」

「うん」

ぱくつ。

あたしの食べかけを、躊躇もせずに口に運ぶ水萌。

「代わりに水萌の、ちょっともらっね」

ぱくつ。

あたしも水萌が食べていたストロベリーとバニラのミックスソフトにかじりついた。

「あゝ、熱希ちゃん、私よりたくさん食べたあゝ」

水萌は、そんな子供染みた文句を言ってくる。

仕方がないなあ、この子は。

「ほら、もっと食べていいから」

あたしがマンゴーソフトを彼女の目の前に差し出すと、「わーい」とばかりにかぶりついてくる。

「うーん、相変わらずなのだ」

「うん、相変わらずだ」

呆れ顔のふたりがあたしたちの様子をジト目で見ながら、そんな感想を漏らしていた。

公園を出て少し歩くと、待望の時間がやってくる。

家の方向の係上、フーミンや土柳とはここで別れ、水萌とふたりの時間となるのだ。

といっても、あたしの家はこの路地をまっすぐ行った先のすぐ右手にある。

距離にして百メートルくらいだろうか。

ふたりきりの時間が短すぎるのが、とても残念なのだった。

「やっと涼しくなってきたわね」

「そうだねえ、すぐ暗くなるよ」

あたしは水萌に話しかける。少しでも一緒にお喋りを楽しみたい

からだ。

水萌はあたしから話しかけないと、なかなか自分からは話しかけてくれない。基本的におとなしいタイプの女の子なのだ。

別な言い方をすれば、受けの性格、ということになる。だからあたしが攻めにならないと。

あれ？ なにかおかしいような気も……。
ま、いいか。

「それにしても水萌、その巾着袋、いい加減新しいのに買い換えた
ら？ さすがにちよつと、汚いじゃない」

彼女のカバンには、薄汚れた巾着袋がぶら下げられていた。
小学生の頃いじめっ子たちにからかわれていた、宝物と言っていたあの巾着袋だ。水萌はそれを、出かけるときには必ず持ち歩いている。

「うゝ、でもこれは袋も中身も宝物だからあゝ。汚いなんて言われ
たらあゝ、いくら熱希ちゃんでも、私怒っちゃうよあゝ？」

微妙に涙目になりながら訴えかける水萌。

ふにやゝ、こんな可愛い水萌にだったら怒りたいかも、なんて
思ってしまうあたしはダメ人間でしょうか？

そんな感じで喋っていると、すぐに楽しい時間は過ぎ去ってしまった。
った。

「もう家に着いちゃった」

「ふふふ。お疲れ様あ、熱希ちゃん。また明日ねえ」

「うん、またあし……」

手を振って玄関に向かおうとして、なんとなく、違和感を覚えた。

あれ？　今、なにか視界の隅に映ったような……？

あたしは背筋に冷や汗を感じながら、辺りを見回した。主に今あたしたちが歩いてきた道のほうを。

すでに薄暗さが周囲を包み込み、目を凝らしてもはつきりとは確認できない場所が残る。

「ん〜？　熱希ちゃん、どうしたのぉ〜？」

水萌が不思議そうに首をかしげる。

あたしは、嫌な予感がしていた。

ぱつ。水萌の腕に自分の腕を絡める。

「え？　熱希ちゃん〜？」

「しっ。黙って歩いて。一緒に水萌の家まで行くわ。今日、水萌のところに泊めてね」

「え……、うん〜、それは構わないけどぉ〜……」

怪訝な表情を浮かべる水萌を引っ張り、あたしは水萌と仲よく腕を組んだ状態で薄暗い路地を歩み抜け、彼女の家へと向かった。

水萌には両親がいない。

幼い頃、山奥の田舎村に住んでいた水萌は、両親が亡くなったため親戚であるこの家に引き取られたのだそうだ。

水萌を悲しませたくないから、あまり細かくは聞いていないのだけだ。

ただ、あたしはよく水萌が今住んでいる家に遊びに行っていた。

共働きで遅くまで帰ってこない親戚夫婦には、子供がいなかった。だからなのか、水萌のことを本当の娘のように可愛がっているように思えた。

水萌自身も、よくしてもらってるよ、と言っていたから間違いないだろう。

水萌が寂しいだろうと思って、あたしはよく水萌の家にお泊りしていた。

そのときに叔父さん、叔母さんともお話したことがあるけど、とても気のいい夫婦という感じだった。

「あら、熱希ちゃん、来てたのね。今日も泊まってくの？」

「あつ、叔母さん、お帰りなさい。ご迷惑おかけしますが、お願いします」

「ふふふ、迷惑だなんてとんでもない。賑やかになっていいわよお」

夜になって仕事から帰ってきた叔母さんと挨拶を交わして、夕飯までご馳走になる。

叔父さんはまだ仕事から帰ってきていなかったけど、楽しい団らんのひとつときだった。

ただどあたしは、その時間を素直に楽しむことができないでいた。

「熱希ちゃん、どうしたのぉ？」

水萌の部屋に戻ると、彼女が心配そうに訊いてきた。さすがに元気がないのを不審に思ったのだろう。

「ん、なんでもないよ」
「ふん？」

首をかしげている水萌。

わざわざ彼女を不安にさせることもあるまい。まだ確信は持てないのだから。

あたしはさりげなく窓のほうまで歩き、カーテンの端をそつと開けて外に視線を巡らせてみた。

一瞬、誰かが物陰に隠れているような、そんな気がした。

——やっぱり、誰かに見られてる？

夕方、あたしの家の前で、誰かの視線を感じた。

だから水萌の家まで来たのだけど、ふたりで寄り添って歩いているあいだも、足音がついてくる気配を感じ続けていた。

振り返って確かめたわけではないから、あたしの気のせいかもしれないけど。

でも、どうしてもあたしは、胸騒ぎが抑えられなかったのだ。

——水萌、ストーカーかなにかに狙われてるのかな……？

それは充分にありえることだ。なんといっても、水萌は可愛いのだから。

ただの気のせいであってほしいけど、すごく心配だ。

しばらくは水萌から離れないようにしよう。あたしはそう決意していた。

「それじゃ、寝よつか」
「うん」

あたしは電気を消して、水萌の入っているベッドに潜り込む。
お泊りするときには、いつも水萌のベッドと一緒に寝ていた。
水萌はベッドに入るすぐに眠ってしまう。そんな彼女の温もりを
すぐ目の前に感じながら、あたしの意識もまどろみの奥へと落ちて
いった。

翌朝。あたしは水萌と一緒に登校していた。

とはいえ、一緒に登校するのは今日に限ったことではない。

あたしの家は水萌の家と学校のあいだにあるため、いつも水萌があたしの家に呼びに来てくれて、そこから一緒に登校していたからだ。

朝食まで用意してくれた叔母さんにお礼を言って玄関出る。もしかしたら昨日の人影がまだいるかもしれないと考え、視線を巡らせ辺りをうかがった。

さすがに朝からはいないのか、隠れているような人の気配はまったく感じなかった。

それでも、気を抜いてはいけない。あたしは警戒しながら通学路を歩く。

自分の家には昨日のうちに電話をして水萌の家に泊まることを告げていた。

あたしの家は、どうも放任主義というか、自主性に任せているというのか、はたまたあまり気にかけられてないだけなのか、ともかく、うるさく言われることなんてほとんどなかった。

もつとも、水萌の家に泊まるのが月に何回もある日常的な行動だからなのかもしれないけど。

「熱希ちゃん、また水萌ちゃんちに泊まったのだな？」

急に背後から声がかかった。

あたしは辺りを異常なほど警戒しながら歩いていたというのに。気配を消して背後に近づくと、お主、何者だ！？　なんて言う

までもなく、喋り方で瞬時にわかる。

「フーミン！　なんであたしが水萌んとここに泊まったってわかるの！？」

ここはすでにあたしの家を過ぎた先の通学路なのだ。

水萌とはいつも一緒に登校しているわけだし、泊まったとわかるわけがないのに。と思ったのだけど。

「だって、朝寝坊の熱希ちゃんを呼びに行ってから登校したなら、こんな早い時間にここを通るはずないのだ」

……なるほど、鋭い推理だね、ワトソンくん。

どうやらあたしは、かなりずばらなイメージで見られているみた이었다。いやまあ、大正解なのだけど。

「フーミン、おはよう」

にこつ。

爽やかな笑顔で挨拶する水萌。

とはいえこの子、実はすさまじい低血圧だったりする。朝のこの時間だと、普通に歩いたり挨拶したりしているにもかかわらず、ほとんど脳は眠っているという器用な子なのだ。

そこは長年のつき合いであるフーミンもわかっていて、

「ん、おはようなのだ！　でも、ちゃんと起きるのがよいのだよ！」

とかなんとか言って水萌の鼻と口をつまむ。

にこつ。

笑顔を張りつけたままの水萌だったけど、息ができればこの子でもさすがに苦しくなる。

顔がどんどん真っ赤になっていって、今度は青く……ってちょっとフーミン、やりすぎだってば！

「ぶふあゝゝ……。けほけほつ……。あらあゝ、熱希ちゃんにフーミン、おはよあゝ」

フーミンの手をつかんで水萌を助けると、彼女はちょっと咳き込んだものの、何事もなかったかのように挨拶する。

あんだ……。

あたしがずっとそばにいたことすら、夢うつつだったってわけね……。

「ん？」

にこにこにこ。

そんなあたしを、水萌は首をかしげてハテナマークを浮かべながら見つめている。

ああ、もう。そんな笑顔を向けられたら、なにも言えないじゃない！

もともと文句を言うつもりなんてなかったけどさ。正確には、言っても無駄ってことなのだけど。

と、そんなあたしたちの目に、微妙に不自然な光景が映った。

土柳の奴が歩いている。

それはいいのだけど。

奴は女の子と手をつないで歩いていた。

彼女とかそういうのではないだろう。なんせ手をつないでいる相手は、小学生くらいの女の子だったのだから。

あたしはすかさずツツコミを入れる。

「あんた、なに幼女誘拐なんてしてんのよ!？」

「うあ、炎壁!　って、幼女誘拐ってなんだよ!？」

「その子よ、その子!　小学生を誘拐してくるなんて!」

「あほか!　こんな朝っぱらから人通りの多い通学路でそんなことをするか!　って、そういう問題じゃなくて!」

朝っぱらから怪しげなやり取りを交わすあたしたちに、通りがかりの生徒たちも何事かと視線を向ける。

そんな様子を察知したのか、小学生と思われる女の子が、深々と頭を下げてから話し始めた。

「皆様方、兄がいつもお世話になっておりますでございます。わたし、土柳草砂ちばなの妹で、地花と申しますです」

かなりおかしな丁寧語を使いながら、必死に自己紹介してくれる女の子。

これはこれで、可愛いわあ。

でも、妹だったのか。

ま、土柳の奴に、犯罪に手を染める根性なんてあるはずないのだから、予想はしていたけど。

「妹さんだったのね。誘拐じゃなかったんだ。ちえっ!」

「ちえ、ってなんだよ!」

土柳はあたしがなにか言うつと絶対突っかかってくるから面白いわ。

それはともかく。

「地花ちゃん、だっけ？ 小学生だよ、四年生くらいかなあ？」

「えっと、学年は二年生でございますです」

あたしの問いに、はつきりとした口調で答える地花ちゃん。

「ほえ〜。小学校二年生にしては、しっかりしてるなあ。土柳の妹なのに。きつと血はつながってないんだろうね」

「お前なあ……」

土柳のぼやきを当然ながら無視していると、地花ちゃんが控えめに口を開いた。

「あのあの、訂正が遅れて失礼致しましたですよ。わたくし、小学生ではなくて、中学生でございますです」

「え……ええええ〜〜〜っ!？」

朝の通学路に、土柳兄妹以外三人の声がこだました。

中学二年生にはまったく見えないほど小さい地花ちゃんは、お兄ちゃんである土柳にべったりらしい。

土柳は毎日手をつないで中学校まで送ってから登校していたのだという。

地花ちゃんの学校は、林原北高校から歩いて五分程度の距離にある、市立林原中学校だった。

考えてみたら地花ちゃんの服装はセーラー服。あたしたちが一年ちよつと前まで着ていたのと同じ制服だ。

だから、彼女が中学生というのは事実なのだろう。

いつもならもつと早い時間に送っていたようだけど、今日は行事の都合でいつもよりも中学校の始まる時間が少しだけ遅かったため、この時間に歩いていたらのだそうだ。

中学生にもなってお兄ちゃんにべったりって、どうなのよ、しかも土柳の奴なのに。とも思っただけど、まあ、人それぞれなのだろう。そんなこんなで地花ちゃんに話を聞きながらゆっくりまったり歩いていたら、あたしたちはしっかりと遅刻してしまった。

——あつ。

教室に入ると朝のホームルームはもう終わっていた。それはべつにいいのだけど。

一時間目の授業が始まるのをぼーっと待っているとき、あたしはふと気づいた。

地花ちゃんと会ったことですっかり忘れていた。水萌を狙うストーカーの件を。

大切な水萌に関する、こんな大切な、というか大変な話を忘れてしまっていたなんて。

あたしのバカバカバカ！

でも……じっくり腰をすえて話したほうがいい内容。短い休み時間では話しきれないかもしれない。

ここは昼休みを待ってから話したほうがいいかな。それまでに、頭の中で考えをまとめておこう。

あたしは、そう決めた。

そんなわけで午前中は授業に集中できなくて、ぼけーとしているのを見咎められて先生に怒られたりしたのだけど。

「まったく、あんたはいつもいつも……」

なぜどの先生にも、「いつも」と言われるのだろうか。謎だわ。

それはともかく、昼休みになった。

あたしたちはいつも食堂を利用している。

フーミンはお弁当派なのだけど、それでもあたしたちと一緒に食堂で食べる。今日もいつもどおり、四人で席を取った。

そう、どういうわけか土柳の奴もあたしたちと一緒にお昼を食べているのだ。

女子の集まりの中に男子が入ってくるな！ とあたしは怒鳴りつけてやったのだけど。

まあまあ、いいじゃない、大勢のほう楽しいよ、なんて水萌に笑顔で言われたら拒否なんてできなくなってしまうっつものだ。

と、土柳の奴のことなんてどうでもいい。

今はストーカーの件を話し合わない。

他の生徒の声でうるさい食堂で話すのもどうかとは思っただけど、逆に喧騒に紛れていいかもしれない。

「ストーカー？」

あたしがテーブルに身を乗り出して小声で話し始めると、他の三人も同じように身を乗り出し小声になる。

本当はすぐにでも話したかったけど、一応みんなが食べ終わるのを待ってから話し始めた。そうでないと、こんなふうに身を乗り出したら、制服のリボンやネクタイが、ラーメンやうどんやらお味噌汁やらに浸かっちゃうからね。

「うん。確信はないんだけど、なんか、水萌のあとをつけてるみたかった」

「……という話をすれば自然な流れで水萌ちゃんのところにお泊りできるから、そんな嘘をついた。というわけではないのだね？」

フーミンのツッコミに過剰に反応するあたし。

「な、なんであたしがそんなことするのよ！……でも、結構いい作戦かも……」

後半に思わず本音がただ漏れしていたのはご愛嬌ってことで。

「……ま、炎壁にはなにも言うまい。とりあえず、詳しく話せよ」

真剣な顔でそう言う土柳。親身になって話を聞いてくれる姿勢がうかがえる。

実は案外いい奴なのかもしれない。あたしの中の土柳のポイントがマイナス三万ポイントから一気にマイナス五百ポイントくらいまで急激にアップした感じた。

とにかく、あたしが昨日の帰りに感じた気配と、水萌の部屋から見えた人影のことを、みんなに詳しく語って聞かせた。

「熱希ちゃん……、本当にそうなのお？ 怖いよお」

怯える水萌。

こんな表情をさせたくないから、話したくはなかったというのが正直な気持ちだったけど。

でも、なにか起こってしまったからでは遅いのだ。それに水萌は絶対にあたしが護るのだから。

「大丈夫、あたしがついてるよ」
「うん……」

横に座っていた水萌が、あたしの腕にすり寄ってくる。

「ふゝむ。でもそれだけだと、熱希ちゃんの気のせいという可能性も捨てきれないのだ」

「そうだな。もちろん沢湖さんが危険にさらされないように充分注意したほうがいいと思うけど、本当にそんな人影が存在するのか、まずは確認する必要があるな」

水萌と違って、他のふたりは冷静だった。

「じゃあ、今日の放課後、いろいろ寄り道しながら確認するといいいのだ」

「ああ、そうだな。頑張れよ」

がしつ。

あれだけ親身に聞いていたのに、今さら逃げようとする発言を吐きやがった土柳を、あたしは後ろから羽交い絞めにして首を決める。

「あんたも、協力するんだ！」

「いや、その、今日はさ、妹と散歩に行く約束が……」

「妹と散歩って……。ツツコミどころだとは思うけど、ま、それはいいわ。ともかく散歩と言えなくもないんだから、妹さんもあたしたちと一緒に来ればいいじゃない」

あたしの提案に、

「どうしてそうなるんだ！」

などと土柳は異論を唱えやがった。

もちろんここは多勢に無勢、民主主義の正しい解決法、多数決に

よって問答無用という流れとなったのは言うまでもない。

「はあ、わかりましたのでございます」

校門を出て待ち合わせ場所に着いたあたしたち。

待っていた地花ちゃんに、「じゃ、そういうことだから」と言うと、彼女は素直にあたしたちの申し出を受け入れてくれた。

うーん、兄と違って物分りのいい子で助かった。

「草砂兄くさすいがすまきにされている現状を見れば、わたくしがどう足掻いたところで、結局けつごうと一緒にする羽目になるのが目に見えておりますでございますし」

はあ、つとため息をつく地花ちゃん。

どうやら、諦めのいい子と言ったほうがよさそうだった。

それはともかく、作戦決行だ。

地花ちゃん以外には事前に教室で話してある。そして地花ちゃんにはあらかじめ土柳からメールで連絡してもらってあった。

だからさっきのような会話で、状況を理解してもらえたのだ。

しかし土柳の奴、生意気にもケータイを持っているとは。

くうくうくう、あたしや水萌は持っていないのに。

持っていたら絶対毎日何十通も水萌とメールするのにっ！

と、それは今は置いて。

土柳のケータイは、地花ちゃんとお揃いの花柄で可愛いケータイだった。

それをネタに思う存分からかわせてもらったけどさ。くっくくく。

と、それも今は置いて。

ともかく、連絡はついている。作戦としてはこうだ。

地花ちゃんという新たな仲間が増えてはいたけど、いつも一緒に帰っているこのメンバー。

とりあえず途中までいつもどおり一緒に帰る。

危険を回避するなら全員でまとまっていたほうがいいだろうけど、それでは相手の動きに気づけるかどうかかわからない。

それに、大勢で一緒にいたらきつとストーカーだって警戒するだろう。

なので、二手に分かれることにした。

あたしと水萌が、買い物に行きたいからと商店街のほうへ寄り道する。他のメンバーは、じゃあここで、と言って別れる。

で、あたしたちふたりのあとを、かなり離れた場所から追いかけてきてもらうのだ。

ストーカーがいるなら、少なくともあたしたちが視界に映る範囲内に隠れているはず。

だから、買い物ルートをあらかじめ決めておき、あたしたちが視界から少し外れるくらいの位置を保ったまま、辺りの様子をうかがってもらうことにした。

怪しい動きをする人がいれば、これできつとわかるだろう。

離れて様子を探る土柳兄妹とフーミンの三人のほうこそ、不審人物と思われるかもしれない、という心配があるのは事実だった。

職務質問くらいはされるかもしれないけど、そこはそれ、捕まるのはあたしじゃないからOKってことで。

そんなわけで水萌とふたりきりの時間をしつかりゲットしたあたし。

なんて手放して喜んでいられる状況ではないのだけど。

ともかく、こちらはあくまでも、おとりだ。

周りに注意しつつも、不自然さを出さないようにしなければなら
ない。

「わぁゝ熱希ちゃん、見て見てえゝ！ このぬいぐるみ可愛いよおゝ！」

子犬のぬいぐるみを手に取って頬にすりすりしている水萌。
うんうん、可愛いよおゝ。水萌がねっ。

「わぁゝ熱希ちゃん、見て見てえゝ！ この服、可愛いよおゝ！」

今度はひらひらのついたワンピースをうっとり眺める水萌。
さすがに洋服に頬をすりすりしたりまではしてないけど。

うんうん、ほんと、可愛い可愛い。そんな服を着た水萌を想像し
ただけで、あたしは思わず顔が緩んじやうよっ。

こんな感じで楽しいひとときを過ごしているうちに、夕方になっ
た。

当初の目的をほとんど空の彼方にすっ飛ばしてしまいそうになり
ながら、あたしはどうか、たまぁゝゝに思い出して辺りの様子
をうかがっていた。

その結果、やっぱりこそこそ隠れているような人影を確認することができた。

あたしも水萌もケータイを持っていないので、みんなと連絡はつけられないけど、ここは当初の予定どおりに行動しよう。

ひとしきり商店街を回ったあと、あたしたちは家路に就く。

今日も続けて水萌の家に泊まったりしたら不自然かもしれないから、あたしは自宅へと戻るようになっていた。

「それじゃ、また明日ね！」

「うん、また明日あゝ」

あたしと別れたあと、水萌はひとりになってしまっけど、彼女を視界に捉えられる範囲で三人組が隠れて追跡する手はずになっている。

家に入る前に、こそこそ隠れて歩いている三人組の姿が確認できた。うんうん、ちゃんと役目を果たしているようね。

もし水萌に危険が及ぶようなら三人で助けること。これは絶対！
そう念を押してあった。

念のため、ふと目が合った土柳を睨みつけておく。

ひいつ、と小さく悲鳴を漏らし怯えた目をする奴を見て、あたしは満足しながら玄関に入るのだった。

このあとは、水萌が家に着くまで追跡したらフーミンは自分の家に帰り、土柳兄妹はそのまま水萌の家の周りで様子をうかがい続けることになっている。

土柳だけだと怪しいと思われるだろうから、地花ちゃんも一緒に、ということにしてあった。もちろんそれでも怪しいだろうけど。

フーミンが家に着いたら、あたしの家に電話を入れる。状況報告のためだ。

ケータイを持っている土柳兄妹に報告を任せなかったのは、もしストーカーに見つかっていたら、電話をした時点で危険が迫る可能性もあると考えたからだ。

玄関を上がったあたしは部屋にカバンを置くとすぐに電話の前に陣取り、今か今かとフーミンからの連絡を待っていた。

うつゝゝゝ、待っている時間って、ほんと長い。

ああ、こんなことをしているあいだに、水萌が危険な目に遭っていないだろうか。

そんな心配ばかりが浮かんできて、そわそわしながら電話の前を行ったり来たり。

弟が腫れ物に触れるような目で見ながら、あたしを避けるように廊下をすり抜けていった気がしたけど、そんな今のあたしの眼中にはなかった。

ジリリリリリリリン。

電話が鳴った。

あたしは最初の呼び出し音が途切れる間もなく、今どき珍しい黒電話の受話器を手に取る。

「遅い！」

「うあ、いきなりなんなのだ。ウチはこれでも大急ぎだったのだよ？」

あたしの剣幕に、さすがのフーミンもたじろいでいるようだった。と、そんなことより報告だ。あたしはフーミンから今日の話を話してもらった。

あたしたちが商店街をうろついているあいだ、やはり怪しい人影が隠れて見ているのがわかったとのこと。

しかも、それはひとりではない。

何ヶ所かに分かれて、数人いるようだった。

「ひとりじゃないの？ それって、ストーカーってわけじゃない……ってことかな？」

「うーん、よくわからないのだ。でも、怪しい奴らが水萌ちゃんをこそこそ隠れて見ていたのは確かなのだ」

複数の怪しい人影……。

これって、あたしたちの手に負える事態なのだろうか？

フーミンの報告は、まだあった。

あたしと別れたあと、水萌はひとりで歩いていたけど、そのときも水萌をうかがう人影の存在を確認することができたそうだ。

今までずっと、水萌があたしとふたりでいるときに気配を感じていた。もしかしたらあたしのほうが狙われているのでは、という可能性も考えていたのだけど。

でもこれで奴らの目的が水萌だということもはっきりした。

「水萌、今、大丈夫かなあ……」

「それは大丈夫だと思うのだ。土柳兄妹も監視してるのだし。もしなにかあったら、ケータイでウチの家に連絡する手はずなのだ。電話中にかかってきてもキャッチホンでわかるから、電話は来てないってことなのだよ」

「そっか。でも、心配だなあ……」

ああ、今すぐにも水萌のもとへ飛んでいきたい。

「心配だからって、夜に水萌ちゃんの家まで行ったりしちゃダメなのだよ？ 熱希ちゃんが危険な目に遭うかもしれないのだ」

あたしの考えを読んでいるかのように、フーミンが釘を刺す。

「……わかってるよ」

「よろしい。おそらく家の中にいれば水萌ちゃんも安全なのだ。だから、軽はずみな行動は慎むのだよ」

「うん」

「それじゃあ、そろそろ切るのだ。土柳のケータイにも電話をかけて合図しないといけないし。三秒くらい鳴らして切るのが終了の合図にしてあるのだ。さすがに徹夜で監視させるわけにもいかないのだよ」

「ん、そうだね。それじゃあ、よろしくね」

あたしは不安を抱えたまま、電話を切った。

ああ、水萌、大丈夫かなあ。

その夜は、心配しすぎてなかなか寝つけなかった。

「本日、第二作戦を決行します！」

「はい？」

次の日の教室、朝のホームルーム前の時間。あたしが高らかに宣言する声に、疑問符を返してくる面々。

それはそうだ。第二作戦というのを、まだ説明していないのだから。

あたしは、夜なかなか寝つけないあいだに、いろいろと考えていた。

警察に言ったところで、なにも被害が出ていない上に、証拠もない現状ではなかなか信じてもらえない。

まずは奴らの目的を確かめるのが先決だろう。

でも、どうやって確かめればいいのか。

じつくりと監視し続ける？

いやいや、そんなまどろっこしいこと、やっていられない。

そのあいだに精神がまいってしまってもものだ。

狙われている水萌本人はのほほんとしているから大丈夫だろうけど、心配するあたしの精神のほうがヤバイ。

ここはこっちよ、奴らをとっ捕まえて直接聞いてしまえば手っ取り早い、そう考えたってわけ。

「熱希ちゃん、それは危険だよぉ」

水萌がもつともな意見を述べる。

「うん、確かにそうなのだ。いくら熱希ちゃんが水萌ちゃんのためなら車だって持ち上げちゃうくらいだとしても、さすがに危ないのだ」

フーミン、それは言いすぎだよ。

いくらあたしだって、そこまでは。バイクくらいなら、いけるかもしれないけど。

「そうだぞ。沢湖さんを危険から護るためとはいえ、炎壁が危険にさらされるのは、さすがにちょっとマズいだろ」

おつ、土柳の奴、あたしのことまで心配してくれるんだ。へへ、珍しい。

「余計に事態がこじれそうだし」

余計なことをつけ加えた土柳には、脳天チョップをお見舞いしてやった。

「でも、だからこそ、こうしてみんなに相談してるんだよ。あたしひとりじゃどうにもならなくても、力を合わせればどうにかなるかもしれないでしょ?」

あたしは、ぐっとこぶしを握って力説する。

「そうねえ。みんなで協力して事件を解決。それって、素晴らしいわあ」

水萌が乗り気になっている。うんうん、思ったとおり。

最近彼女は少年探偵もののマンガにはまっていて、ちびっ子たちが協力して事件を解決するのをうっとりとした目で見ていたのをあたしは知っているのだ。

水萌が喜んでくれるなら、あたしはなんだってする。彼女が望むなら悪魔にだって魂を売るわ！

ふと見ると、フーミンがジト目であたしを見ていた。なるほど、そういうことなのだね。そう瞳で語っているようだった。

相変わらず喋り方はおかしいのに、なかなか鋭い。

「ま、それにさ。危険な目に遭うとしたら、主に土柳だから。危険だと判断したらあたしたちは土柳をおとりとして置いて逃げるしっ！」

「それはまあ、そのとおりなのだ」

「おいこら！　なんだよ、それは！？」

あたしとフーミンの当然のごとき主張に、土柳はどういうわけだか慌てた声で反論してくる。

でもほら、民主主義民主主義。と、問答無用で主張を押し通そうと思ったのだけだ。

「土柳くん、いつも迷惑かけてごめんねえ。でも、私たちにはあなたが必要なのよお。お願いしますねえ」

にこおっつ。

満面の笑顔を咲かせてそんなことを言う水萌。

……あんたもなかなかやるわね……。

「迷惑だなんてとんでもない！　沢湖さん、僕に任せてくれていい

よ！」

真っ赤になって自ら泥沼にはまり込んでいく土柳だった。

で、具体的にどうするのかというと。

あたしたちは放課後、公園に来ていた。

子供たちが喜びそうな、ブランコやら滑り台やら砂場やらジャングルジムやら、そんな遊具がいろいろとある、いわゆる児童公園だ。こないだはここでベンチに座ってアイスを食べたっけ。

それはともかく、今はもう初夏。夕方近くになっているとはいえ、まだ日差しも強い。

公園で遊ぶ子供たちの姿もまばらだった。

そんな中で、あたしたちは、

「もういいかい？」

「まあ、ただだよ」

かくれんぼを始めた。

高校生にもなつて、かくれんぼだあ！？ 僕はイヤだぞ！？

と駄々をこねる土柳もねじ伏せ、一緒に混ざってもらっている。

公園に来る途中、偶然出会った地花ちゃんも強制連行……もとい、お姉ちゃんたちと一緒に遊べると喜んでついてきてくれた。

作戦としては、こうだ。

公園でかくれんぼを始めるあたしたち。

最初は普通に遊んでいるように見せかける。でも、そのうち異変に気づいてあたしが言う。

「あれ？ 水萌は？」

「あれ？ いないのだ」

そして水萌以外が一ヶ所に集まってから、大声で水萌の名前を呼んで彼女を探しているふりをする、というものだ。

公園の中央には、象さんをかたどった滑り台がある。その胴体部分には、横から突き刺さるように土管が設置されていた。

真横から見ると、ふたつ並んだ土管の上に、もうひとつの土管が積み上げられている感じた。

三つの土管は、ぱつと見、象の胴体を貫いて設置されているだけのように見える。

でも実は、下側の土管の片方には、ちょうど真ん中辺りからさらに別の土管が垂直につながっていて、横穴が存在している。

水萌はそこに隠れていてもらうのだ。

外から土管をのぞき込んだとしても、よく見ないと横穴の存在には気づかない。

おそらく、この土管に実際に入って遊んだことのある人にしかわからないだろう。

あたしたちが必死に水萌を探していたら、奴らも慌てるはず。本当に奴らが水萌の様子を隠れてうかがっているのであれば、水萌が突然いなくなったら、きつとなんらかの動きを見せるだろう。

もし慌てている様子があれば、それだけでも水萌を隠れて見ていたという証拠になる。

公園内に入ってきて探し始めたりすれば、こちらの思うツボだ。あたしたちは小さい頃からよくこの公園で遊んでいた。だから地の利はこちらにある。

複数いる奴らの全員を一網打尽、とはいかなくとも、みんなで協力すれば誰かひとりを捕まえるくらいなら可能だろう。そう考えたのだ。

というわけで、ミッションスタート。

公園を取り囲むように何ヶ所かに分かれて身を潜め、こちらの様子をうかがっている怪しい奴らの存在を、あたしたちはすでに確認していた。

作戦が開始されるとすぐ、奴らはこちらの思惑どおり、慌て始めた。

ここからでは正確にはわからないけど、人数は五、六というところか。どうやら公園の入り口前付近の物陰に集まり、なにか話しているようだ。

その動きを見て、あたしたちも一旦集合していた。

表向きは、「いた?」「ううん」といった感じで友人探しの報告をしているように装い、小声で作戦の伝達という本当の目的を果たす。

「奴らが公園に入ってきたら、頃合いを見計らって持ち場についてね」

「うん、わかったのだ」

「了解」

それだけ伝えと、あたしたちは再び水萌の名前を呼びながら公園内の各所に散っていく。

やがて、奴らが公園の中へと入ってきた。

奴らは濃いグレーのスーツに身を包み、サングラスをかけていたり、帽子を深くかぶっていたりと、なかなかに怪しい格好をしていた。

数は全部で六人だった。対するこっちは五人、隠れている水萌は戦力にならないから実質四人だし、相手は大人の男性ばかり。

圧倒的にあたしたちの不利は否めない。

でも、こちらには地の利があるのだ。しかも、こちらの標的としては誰かひとりでいい。

入ってきた奴らは、明らかに慌てた様子で公園内を探していた。

あたしはその中の、やけにトロそうなひとりに目をつける。服装もそいつだけ紺色だったからわかりやすい。

ターゲットはあいつにしよう。

散り散りになったみんなとすれ違う際に、紺色をターゲット、と素早く伝えた。

そのひと言でも、充分に伝わるだろう。

やがて、あたしたちは水萌を探すフリをしながら、それぞれの持ち場へと身を隠す。

奴らは水萌の搜索に集中していて、こちらにまで気が回っていないはずだ。

あたしと土柳はそれぞれ別の下側の土管に、フーミンと地花ちゃんを上側の土管に入った。

「む？ あいつら、どこに行った？」

男の声がすぐそばから聞こえた。

よし、今だ！

あたしはターゲットの男が滑り台の横を通った瞬間、土管の中から素早く右足を出し、そいつの足に引っかける。

「うあっ！？」

奴はものの見事に転倒した。

思ったとおりとはいえ、ほんとにトロい。水萌にも匹敵するトロさかもしれない。

「それ、行くのだっ！」

「ごめんなさいなのでごきますっ！」

倒れたそいつの上に、上側の土管からフーミンと地花ちゃんが飛び下りて乗っかる。

「ぐえっ！」

ふたりとも小柄とはいえ、さすがに落下する速度分も加わるとそれなりの衝撃になったようで、奴はうめき声を上げていた。

「うりゃっ！」

「観念しろ、この！」

土柳とあたしも素早く土管から飛び出し、そいつを押さえつける。いくら大人の男性といっても、四人に取り押さえられている状態だ。ターゲットの男は声を上げながら抵抗するも、あたしたちをはね退けることはできなかった。

心配なのは、残った奴らだ。あいつらが全員集まってあたしたちをどうにかしようとすれば、きつと抵抗できずに捕まってしまう。だからこれは、賭けだった。そしてあたしたちは、賭けに勝った。

「くっ、俺はいいから散れっ！」

異変に気づいた奴らがこちらに向かってくるのを一喝したのは、押さえ込まれている当の本人だった。

一瞬躊躇するも、グレースーツの男たちは散り散りに公園から出ていく。

そして残った男は観念したのか、抵抗をやめてその場でぐったりと頂垂れていた。

「さて、これからどうするのだ？」

黙ったままあぐらをかいて座っている男を取り囲んで、あたしたちは相談していた。

隠れていた水萌も出てきて、一緒にその男を見下ろしている。もう危険はないだろう、そう判断したのだ。

男は完全に観念したのか神妙にはいるものの、なんでもかんでもべらべらと喋ったりはしなかった。

「うーん、さすがにこのままここにいても問題あるかな。奴らが戻ってくるかもしれないし」

「それはないけどな」

男は憮然とした態度で吐き捨てる。

さっきから、こっちの質問には答えないものの、向こうからこうして口を挟んできたりはしていた。

この男、歳は二十代前半くらいだろうか。

サングラスを外させると、結構きりつとしてカッコいい顔立ちをしていた。

「そうねえ、そろそろ暗くなってくるし、とりあえず私の家にも行きましよう。叔父さんも叔母さんも遅いはずだし」

そう言つて、水萌は率先して歩き出した。

でも、それはどうなの？

というか、見ず知らずの男を水萌の家に……？

そ……そんなのダメよ！

と、あたしは気が気ではなかったのだけど、当の本人は全然気にする素振りもなく、自分の案に満足顔の様子で歩き出していた。

笑顔の水萌に、あたしが意見できるはずもない。

土柳兄妹もフーミンも、その男の腕をしっかりとつかんで逃げられないようにしながら、水萌のあとを黙って歩いていた。

ふと、地花ちゃんが訝しげな表情を浮かべているのに気づく。

「どうしたの？ 地花ちゃん」

「……いえ、なんでもないのでございますよ」

そう言いながらも、彼女はやはり、なにか考え込んでいるようだ

つ
た。

「俺たちは、国の機密組織、S Pの一員だ」

水萌の家に着くと、その男は静かな声で語り始めた。

「S Pっていうと、セキュリティポリスってやつ？」

あたしの問いに、

「似たようなものではあるが、ちょっと違うな。俺たちの組織は『スマイルプロジェクト』という極秘機関だ」

男はそう答える。

「極秘機関ですのに喋ってしまつて、よいのでございますか？」
「状況的に仕方ないと判断した。それでも俺は、今回派遣されたグループのリーダーだからな」

地花ちゃんも疑問を口にしたけど、男はそれにも素直に答えてくれた。

「俺はアマサギ。コードネームだが、組織の性質上、本名は言えないことを了承してほしい」

「はい、わかりましたわあ。あつ、お茶を淹れましたので、どうぞあ」

にこりと相変わらず笑顔を浮かべてアマサギと名乗った男に湯飲みを差し出す。

夕方とはいえまだ暑い気候、嫌がらせのつもりだろうか、と考えただけど、水萌がそんなことをするわけはなかった。
熱いお茶は、続いてあたしたちの目の前にも置かれた。

「これは、ありがとう」

そう言っ、て、ずずずとお茶をすす。る。

さすがに今の話を鵜呑みにしていいものは怪しいところだけど、アマサギさんは今、かなり落ち着いて話しているように見えた。

実はやっぱりストーリーカーだったとしたら、とんでもない演技力ということになる。

それならばどこの劇団でもやっていけるだろうから、きっとストーリーカーなんてやっていないで練習に励むだろう。

「それで、そのSPがどうして水萌ちゃんをこそこそと隠れて見ていたのだ？」

フーミンが核心に迫る質問をする。

相変わらず口調はふざけている上に、水萌が出してくれたお菓子をバリバリと音を立てて食べながらではあったけど、至って真剣な眼差しをアマサギさんに向けていた。

「実は……」

そこで一瞬言いよどむアマサギさん。

ここまで話しておいて、今さらためらうことなんてあるのだろうか、とも思っただけど。

その内容を聞けば、確かに言いよどみなくなる気持ちも理解できた。

「彼女……沢湖水萌は、原爆にも匹敵する威力の爆弾なんだ」

カチツ、カチツ、カチツ。

時計の秒針の音が響くほどの静けさ。

文字どおりの『爆弾発言』をした当のアマサギさんでさえも、バツが悪そうな表情を浮かべていた。

「いや、まあ、信じられないのも無理はないと思うが……」

明らかに焦りながら弁明するアマサギさん。

「こいつ、やっぱり怪しいのだ！ 警察に突き出したほうがよいのではないか？」

「わたくしも、それが正しい判断のように思いますのでございます」

という正常な反応を示すフーミンと地花ちゃんに対し、

「そんなにいじめちゃ、だめだよぉ」

と相変わらず笑顔のままの水萌。

こんな怪しい相手に対して、しっかりとお茶のおかわりを注いであげていた。

あたしとしては、周りにはあまりあてにできないと考え、この人の

言うことがホントか嘘か、自分でしつかりと見極めようと慎重に成り行きを見守っていた。

……おや？　そういえばさっきから、土柳の奴が静かだな。

ふとそう思っただけ視線を向けてみると、なにやら土柳は顔を少し赤らめている。

「土柳、どうしたの？」

「だって、女の子の家にお邪魔するのなんて初めてだから……。しかも、沢湖さんの家だしさ……」

……相変わらず、使えない奴だ。

でも、居間でこの反応ってことは、水萌の部屋に入ったらどうなってしまうのか。

いやまあ、このあたしがいる限り、そんなことは一生させないけども。

それはともかく。

今はアマサギさんのほうに神経を集中しなきゃ。

どう考えても信じられない話ではある。

水萌が原爆にも匹敵するほどの爆弾？　ありえないありえないありえない！

あたしのわずかばかりしかない理性でさえも、他に考えようもなく、そういう結論に達する。

でも、とりあえず聞くだけ聞いてやってもいいかもしれない。

警察に突き出すのは、それからでも遅くはないだろう。

「水萌が爆弾って、いったいどういうこと？」

あたしは話の先を促してみた。

フーミンたちは、一瞬驚いたような表情を見せていたけど、あたしの意図を察知してくれたのか、口を挟んだりはしなかった。

「どうつて、そのままの意味だよ。実は、とある薬のせいで、彼女の体には非常に強力な爆発性の物質が蓄えられてしまっている――」

アマサギさんの話をまとめると、こういうことのようなだった。

水萌がまだ小さかった頃、とある薬品を投与された。それは認可された薬ではなかった。

水萌は生まれつき体が弱く、そのままでは衰弱死してしまうという状態にまでなっていた。

追い詰められていたのだ。

水萌が生き続けるためには薬を使うしかない。そう判断して、その薬は投与された。

その結果、水萌は無事、生き長らえることができた。でも、副作用があったのだ。とても重大で危険な副作用が。

投与された薬品は、血液に乗って全身を駆け巡る。その過程で、血管から染み出した薬品の成分の一部が血管の外にそのまま溜まってしまう。

それは水萌の全身に及んでいた。

そしてその薬品の成分というのが、爆発性の物質だった。

ただし、衝撃などによって簡単に爆発してしまうわけではない。

泣いたり悲しんだり不安を感じたり、また怒りなども含めストレ

スになりうる負の感情を持つと、どんどんと爆発の危険が高まるのだという。

逆に、笑ったり楽しんだり、リラックスして心地よさを感じたり、といったストレスを軽減するような感情を持てば、爆発する危険性も軽減されていくらしい。

「つまり、彼女は……いや、彼女の笑顔は、いわば国家機密。国を挙げて護るべきものなのだ。そしてその役目を担っているのが、俺たちSPなんだよ」

アマサギさんは淡々とそう言いきった。

「さすがに四六時中彼女を拘束するわけにはいかない。だから俺たちSPは基本的に遠くから見守ることしかできないが、君たちは違う。彼女が負の感情に囚われないように、これからも彼女の友達として今までどおり接してほしい。彼女が爆発したら、とんでもない被害が出てしまうんだ。彼女が笑顔でいられるように、いつも一緒にいてあげてくれ」

誰も、声を出せなかった。

アマサギさんの言ったことは、にわかには信じられなかった。

でも……。

水萌が笑顔でいられるように、ずっと一緒にいる。

それは、爆発の話がなかったとしても、あたしには当然の行動原理だった。

初めて水萌に話しかけられたあの日から、ずっとそうやって生きてきたのだから。

これからだって、変わるわけがない。
たとえ彼女が本当に原爆並みの爆弾だったとしても。

「わかったわ」

あたしの答えに、水萌以外は驚きの表情を浮かべていた。
話した張本人であるアマサギさんでさえも。

水萌だけは、自分が爆弾なのだと言われたにもかかわらず、いつもどおりの笑顔をこぼしている。

「うふふ。あ……ちょっと失礼して、お手洗いに……」

そう言って立ち上がる水萌。

と――、

ふらあ。

バランスを崩して倒れかかる彼女を、あたしは慌てて抱きとめる。

「ちょっと、水萌！ 大丈夫！？」

「うふふ、どうしたのかしらねえ、ちょっとめまいがあ……」

こんな感じだけど、水萌もやっぱり動揺しているんだ。

あたしはそんな水萌を強く抱きしめ、これからもずっとこの子を
護り続けていくことを改めて心に誓うのだった。

「やゝ、涼しくていいねえ。極楽極楽」

「……熱希ちゃん、おばさんみたいなのだ」

失礼なことを言うフーミンに軽く蹴りをかましつつ、あたしは椅子に腰をかける。

あたしたちは今、いつもの面々で隣町のデパートまで来ていた。

ここまでの道のりは暑く暑かったけど、デパートの中のパラダイスを求めて、あたしたちははるばるここまでやってきたのだ。

パラダイスとはもちろん、クーラーの効いた涼しい空間のことだ。

あたしたちの学校には期末テスト前にテスト休みというものがある。

おそらくは、教師側のテスト準備期間なのだろうけど。

それでも、しっかりテスト勉強するように、と念を押されて数日の休みに入るのだ。

当然ながら、そんな教師の思惑に流されるあたしたちではない。

休みは遊ぶためにある。この信念は貫き続ける所存だ。

「アイスも美味しいですので、本当に極楽と表現したいほどの心地よさなのでございますよ」

地花ちゃんもあたしに同意してくれたようだ。

ちなみに地花ちゃんの通う中学校はあたしたちの高校と同じ系列の学校なので、同様に期末テスト前の休みになっていた。

完全に信じきっているとまでは言えないかもしれないけど、あたしたちは水萌が爆弾だという話を受け入れている。

そして受け入れた上で、今までどおりの友達関係を続けている。
そんなの当然だ。あたしにとって水萌は親友以上の大切な存在なのだから。

あたしだけじゃない。

フーミンも、土柳も、地花ちゃんも、まったく変わらず水萌に接してくれている。

もしかしたら大爆発するかもしれない。

確かに簡単に信じられる話ではないけど、アマサギさんは真剣に語っていた。

そんなの嘘でしょ、なんて軽く笑い飛ばせないのもまた事実だった。

それでも変わらず接してくれる仲間たち。今の水萌にとっては、かけがえのない存在と言えるだろう。

あのあと、アマサギさんは水萌に腕時計のような機械を渡した。
爆発の危険が高まった場合、体温の上昇と血流量の増加が起こる。
それを知らせるアラームになっているらしい。

あくまで体温の上昇と血流量の増加を感知するだけなので、風邪で熱が出た、といった状況でもアラームが鳴ってしまうという曖昧な物らしいけど。それでも念のため身に着けているように言われている。

だけど、こんなのを着けるなんて、あたしなら絶対に嫌だった。
だって、マンガチックにデフォルメされているものの、水色の大きな蜘蛛をかたどった飾りがついているのだから。

可愛くないし、正直かなりダサイ……。

あたしは、そう思ったのだけ。

「うわぁ、可愛い！ 素敵ですう！ こんないい物をいただけるなんて。ありがとございますう」

につこお。水萌は満面の笑みで、アマサギさんにお礼を述べていた。

うん、やっぱり美的感覚もかなり普通の人とずれてるわ、この子……。

でも、そんなとも、水萌の可愛いとこなんだけどねっ。

「……………」

ニヤけた顔をさらすあたしに、フーミンがジト目を向けていた。

「屋上に行きたいのだ！」

クーラーの涼しさに身を任せてガラガラとしながら、はや二時間くらいは経っただろうか。

ほどよく脳みそもとろけていたあたしたちの耳に響いたのは、フーミンのそんな声だった。

寝そうになつていた身をはっと起こしてみると、両手を腰に当ててあたしたちを見下ろすフーミンの姿があった。

他のみんなも、うとうとしていたのだろう、びっくりしたような表情をしながらフーミンを見ている。

水萌なんて、少しよだれが垂れてるじゃん。もう、この子は仕方がないなあ。

ハンカチを取り出して拭いてあげる。寝ぼけまなこをあたしに向けて、にっこり笑顔の水萌。

「ありがとお」

はいはい。いつものことよ。
それはともかく。

「フーミン、ここの屋上って確か、お子様向けの遊具とかがある……」

「お子様言っな！ デパートの屋上はロマンなのだよ！」

あたしの言葉に反論するフーミンの瞳は、キラキラと輝いていた。確かにここでこのままぼーっとしているのも微妙ではあるけど。
屋上ねえ……。

「フーミンってば、子供ねえ」

「まったくでございますわ」

「ふふふ、可愛くていいわよお」

「子供って言うんじゃないのだ」！

そんなこんなで、他に目的もないし、あたしたちは屋上へと向かうことにした。

ちょっと意外だったのは、土柳。

「ん、僕もちよつと行きたいかな」

なんて言っていた。

そして屋上に着いたら、土柳はテレビゲームコーナーにかぶりついていた。

どうやらこういう場所では古いゲームが置いてあったりするらしく、場合によってはあたしたちが生まれる前のものまで平然と置かれていることもあるのだそうだ。

というか、土柳の奴がゲーム好きだったとは知らなかった。

「おー、こんなのであるとは！」

なんか、目が輝いてるなあ。こんな活き活きした土柳は初めて見た気がする。

ま、こいつのことは放っておこう。

ゲームコーナーは、景観のためか全面ガラス張りになっているとはいえ、一応室内。空調だって効いている。

でも、フーミンの目的の屋上というのはもちろん、室内部分ではないわけで。

ふと視線を移すと、すでに自動ドアをくぐって外に出ているフーミンと地花ちゃんのはしゃいでいる姿が見えた。

……え？ 地花ちゃん？

目を凝らしてよく見てみれば、丁寧口調ながらもちょっとバカにしている感じだった地花ちゃんが、フーミンと同じくらいのテンションで屋上を駆け回っていた。

屋上全体を見渡してみると、なるほど、その気持ちもわからなくはなかった。

デパートの敷地は結構広い。その屋上なのだから、スペースはなかなかのもの。

その一帯を綺麗に木々や草花で飾っており、コインで動く遊具ばかりではなく、ちょっとした遊園地と言ってもよさそうな乗り物ま

で設置してあった。

敷地全体を上手く立体的に使ってレールを張り巡らせた、なにかのキャラクターをかたどった電車のような乗り物があり、小さなメリーゴーランドや観覧車まであり、さらには柵で囲った範囲内をゴーカートに乗って走れるようになっていた。

これだけいろいろあると、それなりに楽しめるかもしれない。今どきのデパートの屋上って、こんな感じになってるんだ。イメージ的にもっと地味なものを想像していた。

子供向けなのは確かだろうけど、雰囲気的にも悪くない。

ふと気づくと、すぐ横に水萌が立っていた。

「ふふふ。フーミンも地花ちゃんも、あんなにはしゃいでる。可愛いわねえ」

「そうだね。……せっかくだし、あたしたちも行こうか？ 観覧車にでも乗ってみる？ 小っちゃいけど」

「うん、そうしよう」

あたしたちも自動ドアをくぐり、初夏の日差しが照りつける屋上へと足を踏み入れた。

観覧車の前まで来てみた。うん、やっぱり小さい。

だけど、水萌とふたりきりの空間に……。これは、乗るしかない！

さすがにあまり人が多くない屋上遊園。観覧車も常時回っている

わけではなく、客が来たら動かす感じのようだ。

店員さんにふたり分のチケットを渡し、あたしは振り向く。

あれ？ 水萌？

水萌は、入り口から少し離れた場所だなにやら上のほうに視線を向けていた。

ああ、この看板か。

いろいろと注意事項も書いてあるみたいだし、彼女はそれをしっかり読んでいるのだろう。

この子ってば、変なところで律儀というか真面目というか。もちろん、そんなところも水萌のいいところなんだけど。

「水萌。早く来なよ」

「あ……うん」

彼女が走り出すよりも少し早く。

あたしは気づいてしまった。

水萌の頭上目がけて倒れてきている、巨大な看板に！

「……………っ！」

叫んで危険を知らせようと思っているはずなのに、上手く声が出ない。

彼女の頭上にスローモーションのように倒れていく看板だけが、あたしの目にはつきりと映っていた。

ああ、水萌が……！

頭では、どうにかしないと、ってわかっているのに、いざとなる

とまったく身動きなんてできなかった。

と、倒れていく看板とは別に、水萌とは違う人影が視界に映り込む。

そしてその人影は、水萌と重なった。

そう思った刹那、看板が地面に打ちつけられ大きな衝撃音を上げる。

そのすぐそばには、水萌が呆然とした表情で横たわっていた。

「水萌！！」

あたしは彼女に飛びつくように駆け寄った。

「大丈夫！？ 水萌！！」

そこで気づく。彼女が黒いスーツに身を包んだ男性に抱きかかえられていることに。

そのスーツの男自体も地面に倒れ込んでいた。

この人が、水萌を救ってくれたのだ。

「だ……大丈夫かい？」

慌てた顔で店員さんも駆け寄ってくる。

「あ、はい……、大丈夫みたいです」

水萌が、まだなにが起こったのかよくわかっていない様子で、と
りあえずケガがないことだけを伝える。

「ふう、よかった……」

黒スーツの男性がつばやいた。すでに水萌からは離れ、立ち上がっている。

この人にもケガはなさそうだ。
ふと周りに視線を巡らせると、同じような黒いスーツ姿の男が数人、こちらをうかがっていることに気づく。

「どうしたのだ!？」

「大丈夫なのでございますか!？」

「なんだよ、今の音は……って、看板が!？」

衝撃音が聞こえたからだろう、みんなも心配して駆けつけてきた。

「水萌を助けてくれて、ありがとうございました」

あたしは、目の前に立っている男性にお礼を述べる。

「いや、べつに……。それでは私はこれで……」

そう言って去ろうとする男性に、

「SPの人たち……ですよね？」

あたしは小声で尋ねてみた。

男性は一瞬だけこちらを振り向き、ためらっているようではあったけど、

「……ああ」

とだけ答えて去っていった。

その後、あたしたちは店員さんからの謝罪を受けて帰った。

看板が外れて倒れたということで、整備不良の疑いが強いと考えられたからだろう、必要以上に謝罪を繰り返し、総支配人なる人まで現れて頭を下げていた。

最近はいろいろと問題になりやすい風潮だから、デパート側もかなり敏感になっているようだ。

幸い水萌にもケガはなかったし、お詫びとしてお菓子類をいただきましたし、とりあえずよかったと思っておこう。

もらった荷物もあるから、という理由で、あたしたちは電車に乗って帰ることにした。もっとも電車に揺られるのは、ほんの一駅だけだったのだけど。

夕方になっていたとはいえ、やっぱりまだ暑さが残っていた。電車から降りて駅から歩くあいだにも、汗がにじんでくる。

そんなわけで、あたしたちは、

「うちでなにか飲んでいかない？」という水萌のお言葉に甘えることにした。

「あつ、おかえりなさい」

水萌の家に入ると、叔父さんも叔母さんもいないはずなのに、出

迎えてくれる姿があった。

それは、アマサギさんだった。

「……って、なんでここにいるんだ、あんたはっ！」

思わず蹴りを入れそうになるあたし。

「いや、実際に入れてるしっ！」

心の中の解説にツッコミを入れるとは、お主、やるな！？

「そういう問題じゃない！　ともかく、二発目の蹴りは思いとどまってくれ！」

「そうよぉゝ熱希ちゃん。落ち着いてえゝ」

のんびり口調でいつものように微笑んだままの水萌。

「あんたねえ！　叔父さんも叔母さんもいないんでしょ！？　そんな家に勝手に上がり込まれて、なんで平然としていられるのよ！？」

すさまじい剣幕で怒鳴り散らすあたしの言葉に、彼女から返ってきた答えはこうだった。

「勝手にじゃないわよぉゝ。今日はアマサギさん、別の仕事があるから私の護衛にはつけないって、朝に連絡をくれたのぉゝ。それでねえゝ……」

水萌の口調だと長くなるからまとめると、こんな感じだった。

アマサギさんは、「今日は調べ物があるため護衛にはつけない。

でも、いつもどおりSPは護衛につくから安心してくれ」と言っらしい。

調べ物の内容については秘密だったけど、水萌はしつこく聞こうとした。根負けしたアマサギさんは、少しだけ話してしまった。

ちよっとしたレポートを仕上げなければなくて、ファミリーストランにでも行って作業しようかと考えていたことを。

それにしても、ファミレスでレポートなんて、大学生みたいね。SPのリーダーってのも、いろいろと大変なようだ。

ともかく、そんな家でやればいいんじゃないのお？ と水萌が訊いたところ、今日は任務の都合上、この近くから離れられないのだという。

それで、水萌はアマサギさんに提案したのだ。

この家で作業していいですよ、と。

ファミレスで作業したほうが涼しくていいかもしれないけど、作業にはノートパソコンを使っている。

勝手に電気を拝借するわけにもいかないし、バッテリーが切れるまで作業して残りは深夜に家でやるしかないんだよね、とアマサギさんは言っらしい。

そんな不規則な生活では体にも悪いし、電気も使ってOKだから、と水萌は彼を家に引き入れようとした。

さすがに遠慮するアマサギさんだったが、代わりに留守番してもらえればいいから、と笑顔で説得したのだという。

あゝ、水萌に笑顔で言われたら、断りきれないよね、そりゃ。

とりあえず、状況は理解した。

理解はしたけど、納得はいかない。

なんだってこの子は、いくら自分を護ってくれるという存在とは

いえ、よく知らない男性に家の留守を任せられるのか。

「アマサギさん、水萌の部屋に入ったりなんて、してないでしょうねえ〜!？」

「あ……当たり前だっ！」

反論するアマサギさんの顔は、かなり怯えていた。あたしの形相が、それほど怖かったのだろう。

でも、嘘をついている感じではなかったので、この件に関しては不問としておく。

「とにかく、みんな上がってえ〜。居間のソファで適当にくつろいでてね〜。私はお茶を用意するわあ〜」

相変わらず、お客様に出すのはお茶なのね。冷たいジュースなんかはほしいところではあったけど。

居間では、この家の唯一の冷房器具、扇風機が動いていた。

さすがに室内だと日差しが当たるわけではない。まだ初夏の、しかも夕方ともなると、暑さは和らいできていた。

とはいえ、昼間はそれなりの高温だったに違いない。ここでレポ―ト作業をしていたというアマサギさんが、扇風機を使っていたのだろう。

全員に風が当たるように「首振り」モードに設定したあたしは、扇風機の本体がかなり熱くなっていたことから、そう推測した。

「レポートつてのは、終わっただんですか？」

あたしはアマサギさんに訊いてみた。

無言で水萌がお茶を淹れてくるのを待っているというのにも気まずいから、とりあえず話しかけたただけなのだけど。

「ああ、おかげさまで、大体終わっただよ」

ニコツ。

アマサギさんが爽やかな笑顔を返してくれる。

むむむ。

確かに最初に会ったときにも結構カッコいいとは思ってたけど、彼の笑顔には、なんとなくだけど水萌と同じように周りを温かくさせてくれる魅力を感じた。

ふとそんなことを考えている自分に、自分自身が驚いた。

なにを考えてるのよ、あたしは！

だいたい、水萌の笑顔と比べたら格が違っわ、格が！ 水萌の笑顔は最高なんだから！

そんな焦りをよそに、当の水萌本人はいつもどおりの明るい笑顔を振りまきながら、湯飲みを乗せたトレイを持って居間へと戻ってきた。

「そうそう、こんなことがあっただんですよ」

お茶飲みタイムになったあたしたち。アマサギさんもそれに混じっていたので、さっきの屋上遊園で遭遇した出来事を話してみた。

途中までは、頷きながら「そんなことがあったのか」とつぶやいたりしつつ話を聞いていたアマサギさんだったのだけど。

黒スーツの男性の話をし始めると明らかに表情が陰しくなった。

話の腰を折らないようにという配慮なのか、あたしが話し終えるまで、相づちを打つ以外は口を挟まなかったものの、話が終わるやいなや、彼はこう言った。

「その黒スーツの男性だけど、俺たちSPの仲間じゃない可能性が高い」

——え？

呆然とした表情を向けるあたしたち。その空気を感じ取り、アマサギさんはもう一度口を開いた。

「その男性は、俺の手下であるSPの仲間ではなく、偽者だろう、ってことだ」

それって、どういうこと？ あたしには、よく意味がわからなかった。

でも確かに、以前公園で見たSPの人たちはみんなグレーのスーツだった。

アマサギさんが紺色のスーツだったからグレーだけだとは考えていなかったのだけど、どうやらスーツの色は決まっているらしい。アマサギさんは一応リーダー格のようだから、色が違っていただろう。

「で……でも、SPですよ、って訊いたら、ああ、って答えてたわよ？」

「ふむ……。それはきつと、そう訊かれたから安心させるために肯

定しただけだろう」

それにしても、やっぱりよくわからない。

偽者って、いつたいなに？
 ほんととSP自体が秘密の組織なん
 じゃないの？

口々に疑問を投げかけるあたしたちに、アマサギさんが重い口を開いた。

「……実を言うと、ある組織が沢湖さんを狙っているらしいんだ。どうやら奴らは、どこからか沢湖さんが強力な爆弾であることを知り、爆発させようとしているみたいなんだよ」

「ええええ〜！？」

あたしたちは全員、驚きの叫び声を上げた。

もちろん、当の本人である水萌を除いてだけど。

「爆発させたら大惨事になるんでしょ!？」

「ああ、そうだ。だが、なんらかの意図があるのだろう。そこまでつかめてはいないのだが、ともかく危険だというのは確かだ。だからこそ、沢湖さんの警護を厳重にする必要があつたんだよ。それまでは、だいたい二、三人くらいで警護していただけたからね」

アマサギさんは淡々と語る。

語りながらも今後の対応を考えているのだろう。彼の額には、うっすらと汗が浮かんでいた。

「でも、それならどうして奴らは水萌ちゃんを助けてくれたのだ？」

フーミンが疑問をぶつける。

確かにそうだ。爆発させるなら、負の感情があればいい。

助けても恐怖は感じるだろうけど、実際に被害に遭ったほうが痛みなんかもあるだろうし、負の感情としての度合いは確実に強いはず。

もちろん、当たりどころが悪くて意識不明になってそのまま……、なんてことになったら、負の感情自体なくなってしまうかもしれないけど……。

「おそらく、そういう可能性を考慮しての行動ではないだろう。多分、今はまだ爆発させるタイミングではなくて時期を見計らっている、そんな感じなんだと思う」

もちろん推測でしかないが。
アマサギさんは、そうつけ加えた。

「今日もSPは沢湖さんを護っていたんだよね？ そいつらが接触してきたとき、SPの人たちはどうして出てこなかったんだ？」

土柳がアマサギさんを睨みつけるような目をしながら訊く。
まだ疑いの念を消し去ってはいないのだろう。

「様子見をしていたんだと思う。奴らと直接接触しては、なにかと問題になりかねない。沢湖さんに危険がないのならば、出ていく必要はないだろうからね。奴らより先に沢湖さんの危険を察知できなかったのはSP側の落ち度ではあるが、たまたま奴らのほうが近くにいただけだろう」

アマサギさんの説明を聞いて、土柳も一応は納得したようだった。

でも、水萌を護るSPの他に、水萌を爆発させようとしている組織が存在するなんて。

また話がややこしくなってきた。

ただでさえ信じきれない話だというのに。
そろそろあたしの小さな脳みそでは限界を超えそうだ。

だけど、どんなことになったとしても、あたしのすべきことは
決まっている。

「ともかく、君たちも気をつけておいたほうがいいだろう。俺たちが
SPのほうでも、今まで以上に警戒を怠らないようにするよ」

言われるまでもなく、気をつけるつもりだった。

今日は油断して水萌から少し離れてしまい、そのあいだに彼女が
危険な目に遭ってしまった。それを、心から反省していたのだ。

もう二度と、水萌のそばを離れるなんてヘマはしない。

あたしは絶対に水萌を護ると決めているのだから。

「うん」

今あたしがうなっているのには、それなりの理由があった。
水萌を護ると決意を新たにしたら、そんなあたしの目の前に、大いなる問題が降りかかってきていたのだ。

それはもちろん――、

期末テスト。

水萌のことで頭を悩ませていたため、テスト勉強がおろそかになっ
っていたのだ。

いや、水萌のせいにしちゃダメだね。どうせいつも一夜漬けなのだから、テスト前日に集中しなかったのはあたしのミスだ。

気合いを入れる方向を間違えたあたしは、一教科のテストが終わるたびに、今回はヤバいかも、という予感がどんどん膨れていった。

ちなみにテスト勉強に集中しないでなにをしていたのかといえば、水萌の写真を眺めながらニヤニヤしていたわけだけど。

いやいや、もちろん、水萌を護るためにどうすればいいかを、写真を見たりしながら考えていたのよ？ 勉強の合間に、ではあったけど。

でも、勉強中の休憩つてのは、ついつい長くなってしまふもの。それがいつの間にか一時間、二時間と経ち、拳句の果てには眠ってしまつて朝になっていたり。

そんなこんなで、テスト期間の半分か過ぎた今日までの教科は、どう考えてもひどい結果が目に見えていた。

「熱希ちゃん、どうだったあ〜？」
「訊かないで……」

水萌の言葉にも思わず素っ気なく答えてしまった。それくらいひどかったのだ。

「うあ、熱希ちゃんが水萌ちゃんにそんな態度を取るなんて、びっくりなのだっ！」

「炎壁はテストの出来が悪かったみたいだな。テスト中も、うなり声が聞こえてたし」

「むゝ。聞こえてたなら、さりげなく何問かの答えを紙にでも書いて送ってくればいいのに」

「無茶言っなよ」

あたしがテストの結果で沈んでいるというのに、周りみんな明るい。

テストの二日前までは、いつも一緒に遊び回っていたはずなのに……。

「それは普段からコツコツ勉強しているからなのだ」

フーミンにそんなことを言われる。フーミンこそ、コツコツ勉強なんて柄じゃなさそうなのに。

「きゃははっ！ ある意味期待を裏切るのが、ウチの趣味みたいなものなのだよ！」

「確かに意外ではあるな。でも、いつも一緒に遊んでいたといつても夜は家に帰ってるんだから、夕食後の時間だってあるし、勉強する時間は結構あったと思うんだけど」

土柳の奴が痛いところを突いてくる。

「う。だって、水萌と一緒にいられる時間が短すぎて、禁断症状が」

と言うあたしに、

「あゝ、なるほどなのだ」

納得顔のフーミン。

いや、あの、さすがに冗談だったんだけど……。納得されちゃうんだ……。

水萌は、テスト期間中はちゃんと勉強したいからと、あたしと一緒に遊んだりもしなかった。

黒スーツの集団の件もあったし、可能な限り一緒にいたかったのだけ。水萌としては、そこは譲れないようだった。

「どうせ頻繁にお泊りしてるのだから、テスト中もお泊りして一緒に勉強すればよいのではないのか？」

「うふふ。それはダメよ。熱希ちゃん、うちに来ると、全然勉強しなくなっちゃうんだものお」

……水萌の家に行かなかったとしても、全然勉強できてないんだけどね……。

というのは言わないでおく。

さすがに勉強しなかったのなら自業自得としか思われないうつ。実際、そのとおりなのだけ。

「そういう沢湖さんはどうなの？　いつもかなり早めに寝てるとか言ってたと思うけど」

「私は、朝早く起きて、すっきりした頭で勉強するのよ」

土柳の質問に、涼しげな顔でそう答える水萌。

「って、水萌！　あんた、朝は低血圧ですっごいぼーっとしてるじゃないのよっ！」

「え？　うーん、確かに、勉強したって記憶は曖昧なのよねえ。でも、ちゃんと覚えてるみたいで。テスト問題を見たら、朝見たやつだっと思って思うことが多いのよ」

うーん、これも一種の睡眠学習ってことになるのだろうか？

勉強した記憶がないのに内容は覚えてるって、なんだかすごくうらやましい気がする……。ちょっと分けてもらいたいかも。

そう思ったのはあたしだけじゃなかったようで、フーミンと土柳も、物欲しそうな顔で水萌を見つめていた。

「うふふ。でもそれだけじゃないのよ。これでも頑張って、寝るまでの時間は勉強してるんだから。寝る時間だって、いつも比べたら十五分も遅くしてるのよ」

十五分って、あまり変わってないじゃん……。

「と、こんなふうに喋ってるあいだにも時間は過ぎていくのだ。早く帰って明日のテスト勉強をしたほうがいいのだよ。とくに熱希ちゃん」

「う……」

名指しで攻撃を受けるあたし。

「そうだな。補習の教科数は、なるべく少なくしたほうがいいだろう。夏休み補習にまでなったら、さすがに問題だ」

「そうねえ。毎日一緒に遊ぶはずが、毎日学校で補習三昧になっちゃう」

「ぐう……」

すでに補習を受けること前提で話を進められているけど、自分でもそうなりそうだと思っていたのだから反論もできない。

「そんなことになったら禁断症状が悪化して、熱希ちゃんは壊れてしまうのだ！」

いや、さすがにそこまでは……。

でも、もし夏休みにまで補習なんてことになったら、さすがに嫌だ。もちろん先生だって嫌だろうけど。

「熱希ちゃん、頑張ってねっ！ ふあいとおっ！」

につこおっ！ 満面の笑みを向けてくれる水萌。

顔が緩むのが、自分でもよくわかった。

「うん、頑張るよ！」

あたしは、元気が湧いてくるのを感じていた。

「……ここ数日、毎日同じことを言われてたはずだけだな」

……きよ、今日こそは……！ 今日こそは頑張ろう！

でも結局、水萌の写真という誘惑から逃れられなかったあたしは、

その後のテストも大した勉強ができないまま臨むことになり、

「もー、熱希ちゃんってば、ダメじゃないのぉー」

水萌からおでこにペチンとされたのだった。

ちなみに。

ヤバそうだと思っていた各教科のテストだったけど、どの教科もほんとにギリギリのラインで補習は免れていた。

「熱希ちゃんらしいのだ。よっ！ 崖っぷちの女王！」

はやし立てるフーミンに、あたしは無言で蹴りを入れた。

期末テストのあと、夏休みまでは二週間ほどの時間があつた。

そのあいだは基本的に通常の授業が行われ、それらの授業中に採点の終わった教科からテストが返される。

一週間も経つ頃にはすべての教科のテストが返されていた。

残りの一週間も普通に授業があるのだけど、あまりにテストの点数が悪かった人は放課後に補習を受ける。そう、放課後の時間が使われるのだ。

なんとかギリギリ補習を免れたあたしは、ほっと胸を撫で下ろしていた。だって放課後に水萌と一緒にいられる時間がなくなるなんて、あたしは嫌だもん。

というわけで、夏休みまで一週間で切った今日も、放課後はみんなと一緒に下校しつつ他愛もないお喋りに興じていた。

「今日も暑いのだ」

「そりゃ、夏だからな」

「アイスが美味しい季節なのでございますよ」

なぜかいつも、中学から下校してくる地花ちゃんとも合流する。

土柳とケータイで連絡を取って時間を合わせているらしい。

「そうなのだね。それじゃあ、いつもどおりにアイスを買って公園にでも行くのだよ」

フーミンの提案に、珍しく水萌が異論を唱えた。

「あのねえ、今日はあたしの家に来ない？　アイスなら買い置

きのが家にもあるの。箱にたくさん入ってる安いのだけど」

「それはいいけど、どうかしたの？ あっ、なんか不安なことかあるとか？ 黒スーツ？ 水萌は不安を心に溜めちゃダメなんだから、すぐに話してくれなきゃ……」

あたしの矢継ぎ早の質問とお説教を、彼女はいつものほんわか笑顔で遮る。

「違うのお。べつになにもないよ。なんとなく、そんな気分だっただけえ」

「ふむ。まあ、そういう気分ときもあるのだ」

「それでは、水萌さんのお宅にお邪魔するということにさせていだきましようなのでございます」

「うん、わかった。それじゃ、水萌の家にGO！」

こうしてあたしたちは水萌の家へと向かった。

彼女の家に着くと。

「あっ、おかえりなさい」

……やっぱりまたいるのね、あんたは。

出迎えてくれたのはアマサギさんだった。

テスト期間のあと、あたしは毎日のように水萌の家まで遊びに来ているけど、そのたびにこの人とも顔を合わせていた。

テーブルに着いたあたしたちに、冷たい麦茶を出し、

「今日も暑いからね、熱射病に注意しないと」

そう言っって扇風機にスイッチを入れ、首振りの設定にしてくれる

アマサギさん。

なんか、いつの間にかほとんど自分の家のように生活してない？

「うふふ。いいのよあー。あたしが、自分の家のように思ってくれていいって、アマサギさんに言っただからあー」

うんうん、確かに水萌ならそう言うでしょうね。

でも、だからといって本当に自分の家のように生活なんてできる？

……あたしなら、水萌の家だったら、できると言いきれるけど。

でもそれは長年の親友だからであって、出会ってすぐの人がこんなふうに水萌の家の中にいるなんて。

さすがに叔父さんや叔母さんには事情を話していないから、アマサギさんが居座っているのは昼間だけで、夜は外から見張っているみたいだけど。

ま、それはともかく。

「そういえば、明日は大掃除だけだよ。久しぶりに午前中で終わらだし、どこか遊びにでも行こうか？」

あたしの提案に、

「午前中で終わりじゃなくなっちゃって、結構いろいろと遊び回ってるけどな」

土柳が的確なツッコミを入れてくる。

「ちょっと遠出してもいいのだ。とはいっても、暑いからなかなか行動に移せないものなのだよ」

「そうでございますですね。やっぱり近場の駅前商店街が無難でこ

ざいましょうか」

「うーん、そうね。あまり楽しいところないけど、仕方ないかなあ。水萌はどう思う?。」

あたしが水萌に話題を振った、ちょうどそのときだった。

ビーッ！　ビーッ！　ビーッ！　ビーッ！　ビーッ！

突然けたたましい音が鳴り響く。

「な……なに!？」

慌てるあたしたちのもとに、アマサギさんが台所から駆けつけてきた。

「アラームだ！　蜘蛛型腕時計のアラームが鳴ってる!。」

アマサギさんが叫ぶ。

あたしは慌てて水萌の腕をつかんだ。

……あれ？

「腕時計、してないよ?。」

制服の半袖から延びる彼女の白い両手には、腕時計なんてどこにも見当たらなかった。

「あつ、こつちだよー」

水萌がすつと右足を出した。

するつと靴下を下げると、そこにはあの水色の蜘蛛型腕時計が現

れる。

その腕時計からは、耳が痛くなるほどの警告音が鳴り響いていた。

「学校で腕時計してたら没収されちゃうし。でもなるべく肌身離さずって言われてたから。だから、ここに」

足を上げたままの姿勢で説明する水萌。

腕時計を足首につて……。足の細い水萌ならではの、と言えなくもない。

とりあえずあたしは、そつと彼女のスカートを押さえ、足を下ろさせる。

座布団に座った状態で足を上げて足首の腕時計を見せていた水萌。当然ながら、パンツ丸見えだったのだ。

すぐにあたしが押さえだし、角度的にも土柳とかアマサギさんには見えていなかったと思うけど……。

おつと、そんなことを言っている場合ではなかった。

「これ、どうすればいいの!？」

「アラームが鳴っているということは、爆発が近いということかもしれない！ みんな逃げるのが一番だが……」

アマサギさんが答える。

でも、

「水萌を置いて逃げるなんて、できません!」

あたしはきつぱりと言いつつ放った。もちろんみんなも同じ気持ちだ。だけど、爆発が近いなんて……。

「それなら、水萌ちゃんを笑わせればいいのではないかな？　ここはウチが、くすぐりの刑で……」

そう言つて両手をわきわきさせながら水萌に迫るフーミン。

「あのぉ、ちょっと、それは……」

「観念するのだ。おとなしく、くすぐられるのがよいのだよ！」

じりじりと水萌に迫るフーミン。でも、笑わせるって、それでいいのだろうか？

と、それよりも。

あたしはなんだか腑に落ちなかった。

水萌は悲しみとか不安とか、負の感情の蓄積によって爆発してしまつらしい。

だけど今日の水萌は、確かにちよつと元気がなかったみたいだけど、だからといって悲しみを感じていたということはなかったと思う。

とすると不安や不満をずっと抱えていたってこと？

とはいえ、遊びに行くのをやめて水萌の家に来るように提案したのは彼女自身だ。

それにさっきだって、不安なことなんてないと自ら言っていたじゃないか。

だったらどこに爆発する要因があるというのだろうか？

あたしは水萌をじつと見つめる。

顔が赤い。息も少し荒くなっているように思える。

爆発が近くなると体温が上昇するとアマサギさんが言っただけだ……。

よく見ると水萌の体は、小刻みに震えていた。

フーミンのくすぐり攻撃が怖くて震えている……というわけではないよね。

やっぱり爆発するのは怖いんだ、この子でも。

一旦はそう考えたけど、あたしはそれを振り払った。

……いや、違う。これは――。

「水萌、あんた、風邪ひいて熱があるんじゃない？」

ピタッ。

フーミンの動きが止まる。

「あはは。え〜とお、朝からなんか、だるくつてえ〜。それで遊びに行くのは〜、やめてもらったのお〜。でも、風邪〜、なのかなあ〜？」

あたしはフーミンを突き飛ばして、水萌の額に自分の額を当てる。

「やっぱり、熱があるわ！ 風邪なのよ！ 寒気もしてるんでしょ？」

「うん〜」

突き飛ばされたフーミンが、「ひどいのだ〜」と文句を言っていたような気がするけど、そんなのもちろん無視。

あたしはぐつと水萌のアゴをつかみ、口を開けさせる。

「ほら、扁桃腺が腫れてるじゃない。完璧に風邪よ！ ダメじゃないの、ちゃんと言わなきゃ！ 無理したら治るものも治らないわよ？」

「熱希ちゃん、顔怖い……」

「うるさい！」

怒鳴りながらも、爆発が近いわけじゃないとわかったあたしは、ほっと胸を撫で下ろしていた。

水萌は比較的体が弱い。だから、頑張っ て勉強したあとのテスト明けは風邪をひきやすいのだ。

補習の恐怖のせい か、すっかり忘れてしまっ ていたけど。

普段ばーっ とした雰囲気だから、集中してテスト勉強なんかすると体に悪影響を及ぼすのかもしれない、なんて考えたこともあつたっけ。

とりあえず爆発ではなくてよかつ たけど、それでも水萌の風邪は心配だ。

普通に彼女が風邪をひいただけでも、やっぱり心配だけど、今はそれだけじゃない。

熱で頭がぼやけていると、それだけでも精神的には不安なものだ。熱があるなら頭痛もあるはずだし、扁桃腺が腫れているのだからどの痛みもあるかもしれない。

水萌の場合、それが爆発の原因になっ てしまっ 可能性だつてあるのだ。

あたしは彼女に肩を貸して部屋まで連れていき、ベッドに寝かせた。

みんなも心配してはいただろうけど、そろそろとつてきたりはしなかつ た。

汗をかいていたため、タンスから彼女のパジャマを取り出し手渡す。

着替え、手伝おうか？ というあたしの申し出には、自分でできるよーと答えていた。

熱はそれなりに高そうだつ たけど、意識はしっかりしているみた

いだ。

「それじゃあ、着替えたらおとなしく寝てるのよ？ おかゆ作ってきてあげるから、待っててね」

「わあ、ありがとう熱希ちゃん。いつもすまないねえ、ごぼほ」

「それは言わない約束よ」

なんだ、結構余裕あるじゃん。そう思いながら、あたしは階段を下りる。

「どうでございましたか？」

みんな心配して待っていたみたいだ。いきなりの質問攻め。

「うん、大丈夫そう。今着替えてるわ。土柳、のぞきに行ったりしたら殺すよ？」

「そんなことしないよ！」

ともかくあたしは台所へ向かい、おかゆの用意を始める。

「ほほ、熱希ちゃんが料理するなんて、とっても意外なのだ」

フーミンがおかゆくらいで失礼なことを言ってくる。

「ひどいなあ。それでも家では当番制だからちゃんと料理もしてるんだよ？ まあ、フーミンは見た目どおり料理できないんだろうけど」

「ギクッ」

そんな会話をしつつ、手早くおかゆを作り終えた。

「確かここに梅干しが……。うん、あったあった」

「水萌ちゃんの家なのに、知り尽くしてる感じなのだ。さすが熱希ちゃんなのだ」

「ほっほっほ。水萌に関することならどんなことでも知りたいと思うのが、親友つてものよ」

「なんかちよつと違うと思いますのでございます……」

地花ちゃんまで少し微妙な目線で見ているような感じだったけど、今さらあたしがそんなことを気にするはずもなかった。

おかゆを持って水萌の部屋に戻ると、彼女は言われたとおり、おとなしくベッドに横になっていた。

気温が高めで蒸し暑いとはいえ、寒気がしているのだから体を冷やすわけにもいかない。彼女はタオルケットをかけて、すやすやと寝息を立てていた。

「水萌、寝ちゃった？」

小声で話しかけてみる。

もし寝てしまったのなら、起こすことはないと思ったからだ。

「あ……うつん、目をつぶってたただけだよ」

すぐに体を起こす水萌。

おかゆを乗せたトレイを見て、

「わあ、美味しそう」

笑顔を浮かべた。

よかった、食欲もあるみたいね。
立ち上がろうとする彼女に制止をかける。

「そのままベッドの上でいいわよ。食べさせてあげるから」

「……うん、ありがとう」

あたしはベッドの横に座り、おかゆをふーふうしながら水萌に食べさせてあげた。

「美味しいよ」

ひと口ごとに満面の笑みを浮かべてくれる彼女に、完全にメロメロなあたし。

あゝんもう、なんでこんなに可愛いのかしら、この子。

「……やっぱり、相変わらずって感じなのだ」

いつの間にやらフーミンが部屋に入ってきていた。

「フーミン、いつの間に!」

さすがにあたしはちょっと赤くなる。

ちょうど水萌があたしの持ったスプーンをぱくつと口にくわえたところだったし。

「うん、ウチらはここにいてもお邪魔なだけだし、もう帰ろうと思うのだよ。土柳兄妹とアマサギさんも。ウチらが下にいたら、水萌ちゃんも気になってゆっくり休めないかもしれないし。それを言いに来たのだ」

フーミンは、あたしと水萌の様子にはとくに驚いたりすることもなく伝える。

きつと、いつもどおり、としか思われていないのだろう。

「あ、そつか。うん、わかった。あとはあたしに任せて！」

「なにもできなくて、ごめんなのだ。……水萌ちゃん、ゆっくり休むのだよ？」

「うん、心配してくれて、ありがとう」

にこお。

水萌は、風邪でも歪むことのない笑顔でフーミンに答えていた。

「それにしても、足首に腕時計なんて……、足に違和感あって嫌じゃなかった？」

あたしは、おかゆをふーふーして冷ましているあいだも、積極的に水萌に話しかけた。

少しでも気を紛らわしたほうが、風邪の苦しさを忘れることができると思ったからだ。

「え？ 私は全然気にならないよ？」

「……さすが水萌。鈍感ね」

ふーふー。

「ええ？」

ふーふー。ぱくつ。もぐもぐ。

「でも、肌身離さず着けていると言われたからって、そこまでしなくても思っただけだ。今だって腕にしているし」

そう、ふと見ると彼女の腕には水色の蜘蛛型腕時計が巻かれていた。さっき着替えたときに足首から外してつけ替えたのだろう。今はもうアラームが鳴っていないということは、熱も下がってきただけのことなのかな。

「うん。だって、この蜘蛛可愛いよ？ お風呂に入るとき以外は、ずっとしてるよぉ」

ふーふー。

ふむ。これを可愛いという感覚もわからないけど、それよりも、

「今も着けてるってことは、寝るときもずっと着けっぱなしなんだよね？」

「うん、そうだよぉ」

ふーふー。

やっぱり水萌は、

「鈍感だ」

「ええ……？ 熱希ちゃんひどい……」

ぱくつ。もぐもぐ。

「でも、おかゆ美味しい」

にこおっつ。

ああもっ、鈍感でもなんでも構わないわ。水萌は水萌だもん。

水萌がおかゆを食べ終わると、あたしは用意してあった風邪薬と水を差し出した。

「早くよくなって、一緒に遊び回ろうね。夏休みも近いんだからさ」
「うん、頑張つて治すよっ」

薬を飲み、水萌は再び横になる。

その額に濡れたタオルをそっと乗せてあげた。

「ひゃっ。わあ、冷たくて気持ちいい」

「ふふふ。氷をタオルに挟み込んでおいたのよ。もう全部溶けちゃったから、ちょうど冷たくていい感じでしょ？」

「うん、ありがとっ」

「すぐにぬるくなっちゃうだろうけど。そうね、氷水を持ってきておこうかな」

あたしが氷水を用意して部屋に戻ると、水萌はすでに寝息を立てていた。

食事も終えたし薬も飲んだから、今度は本当に寝てしまったのだろっ。

彼女の額に浮かんでいた汗を軽くタオルで拭う。

そして一晩中水萌の看病を続けたあたしは、いつの間にかベッドに身を突っ伏す格好で眠ってしまったらしい。

朝起きたあたしの背中には、水萌にかけてあったタオルケットが半分かかっていた。

さて、それから数日後。

大掃除などもすべて終わり、一学期の終業式。

今あたしたちの教室では、恒例の行事が執り行われていた。そう、地獄の通知表受け渡しの刑が……。

「熱希ちゃん、どうだったのだ？ 見せるのだ見せるのだ！」

フーミンがニヤニヤ顔で訊いてくる。

というか、すでにあたしの手から勝手に通知表を奪い、眺め始めていた。

同様に水萌や土柳の通知表まで机の上に並べられて、その中身をさらしている。

みんな、テスト二日前まであたしと一緒に遊び回っていたわりには、通知表の数値にも全然問題なんてなさそうだった。

……あたし以外は。

くそお、なんでみんな、そんなに勉強できるんだ。

うちの学校は五段階評価。水萌は体育以外ほとんど四以上とかなり優秀な成績だった。

フーミンや土柳も、すべて三以上で、平均より上くらいの成績は取っているようだ。

それに比べて、あたしの通知表に並んだ二の数字の多いこと……。ちなみに、一だと問答無用で夏休みの補習となる。それが避けられたのだから、よしとしなくては……。

「熱希ちゃんは、相変わらずなのだ……」
「そうだな……」

フーミンと土柳が哀れみの眼差しを向けていた。うつ、そんな目で見ないで……。

うつん、でもこの成績じゃ、さすがにお母さんに怒られるかなあ……。

でも、もう過ぎたこと。気にしていたってしょうがない。あたしは綺麗さっぱり忘れることにした。

ということ、翌日。

待望の夏休み初日。

今日は曇り空で風もあり、夏にしては比較的涼しい陽気だった。

とりあえず、公園に集合！ あたしはいつもの面々に召集をかけていた。夏休みの予定でも立てよう、という目的だ。

そんなの終業式までに学校で相談しておけばいいのに、と思うかもしれないけど、これがあたしたちのスタイルなのだ。

「お待たせ致しまして申し訳ありませんでしたのです」

ぺこり。深々と頭を下げる地花ちゃん。

「遅れて悪かったな」

その隣では土柳が誠意のこもっていない声を放っていた。

べつに遅れてきたことを咎めるつもりなんてなかったのだけど。
地花ちゃんとの対比で、こいつの態度が微妙に許せなく……。

「遅いぞ！ もっと気合い入れて来い！ 水萌を待たせるなんて、
何様のつもりよ！ 蹴り入れるわよ！」

「いや、すでに入れてるのだよ」

「そ、そうだよ……！ だいたい、何様のつもり、って、お前こそ
何様の……」

珍しく反論してくる土柳をギロリと睨みつける。

「ひい！」

言いたいことを言い終えないうちに、怯え始める土柳。
ふん、勝った！

「相変わらずなのでございますね。草砂兄がどんどん惨めにな
っていくように感じますですよ」

「そういう役割だから、いいのではないのかな？」

「うふふ、結構楽しそうだよねえ」

口々に勝手なことを言う面々。

「楽しいわけあるかー！」

土柳の叫び声が寂しくこだましていたけど、それもよくある日常
のひとコマだった。

涼しい陽気とはいえ、夏の定番スタイルということで、あたしたちはアイスを食べながらベンチに座って話していた。

「せっかくだしー、どっか行きたいよねえ」

「夏といったら海なのだよ」

「山も捨てきれないのでございますよ」

「子供なのになかなか渋いね地花ちゃん」

「子供と言わないでくださいませです。これでも中学生なのでございますですよ」

「でも、そうだな。山がいいと思うぞ！」

「む、なんとなく気づいちゃったのだ。土柳っちはカナヅチなのだな？」

「ギクッ！」

「あらあゝ、それは大変ねえ」

「ふっふっふ、んじゃあ、海に決定！」

「ぐあゝゝゝ、鬼がいる！」

つてな感じで順調に（？）話は進んでいく。

と、音も立てずあたしたちのそばに滑り込んでくる人影があった。その人影は、屈んで目立たないようにしながら、小声で喋り出した。

「失礼致します。私、SPのシラサギと申します」

それは女性だった。

でも、グレーのスーツに身を包んでいるところを見ると、SPの人というのは本当なのだろう。

「女性の方もいたんですね」

「大柄なほうですし、武術にも自信はあります。女性だからといって軽視しないでいただきたいです」

あたしはべつに、そういうつもりで言ったわけではなかったのだけど、シラサギさんは過剰に気にしているようだった。

男性ばかりの職場で、体力も必要な仕事なのは確かだろう。女に勤まるのか？　なんて陰口を叩かれたり、あからさまに待遇が違っていたり、といったこともあったのかもしれない。

とりあえず、S Pの人が接触してきたということは、なにかあるに違いない。

あたしは、周りをうかがってみた。

「今から、奴らが我々に接触してくるという情報が入りました」

奴らというと……、このあいだの黒スーツの組織か。

「アマサギを筆頭に数名で接触を受ける予定です。そのあいだ、念のため私がある方の方のそばに仕えて、お護り致します」

その言葉が終わらないうちに、すでに動きがあった。

公園の入り口辺りに、紺色のスーツを着たアマサギさんと、グレイのスーツの男性ふたりが立つ。その目の前に、黒スーツの男性が三人。

真ん中の黒スーツが右手を差し出す。アマサギさんも右手を出し、握手を交わしているようだった。

「接触するといっても、べつに戦うわけではありません。向こうも

バカじゃないですから。なるべく穏便に済ませるため、話し合いを求めてきたのです」

シラサギさんの解説を聞きながら、固唾を吞んで事の成り行きを見守るあたしたち。

もちろん、あたしたちが見守っていたところで、どうなるものでもないのだけど。

「だけど、こんな目立つところで話し合いするなんて、危険ではないのか？ 港の倉庫にでも呼び出してというのが定番なのではないかな？」

フーミンが疑問を投げかける。

「状況にもよると思いますが、それだと呼び出されたほうも警戒するでしょう。あくまでも今回は穏便な話し合いということになっていきますから。おそらく向こうも周りに数名は隠れて様子をうかがっていると思われます」

「つまり、両方が安心できるように、見通しのいい場所で、ということだな」

土柳が冷静につぶやいた。

いつもはあんななのに、意外と落ち着いてるんだよね、土柳って。

「ええ、そうです。会話も、一般の人が聞いてもわからないように暗号のようなものを織りまぜてあります。ですから、危険はないはずです。もちろん、相手が強硬手段に打って出るという可能性もないとは言いきれませんが」

そのためにSPが待機しているのだという。それは相手にとって

も同じなのだろう。

やがて、黒スーツとアマサギさんが一礼を交わし、奴らは素早く去っていった。アマサギさん以外のSPも、すぐに物陰に身を潜めたようで、いつの間にか姿が見えなくなっていた。

そしてアマサギさんだけは、そのまま公園に入ってきて、あたしたちのそばまで近寄ってくる。

「アマサギ、どうでしたか？」

「どうやら、あまり猶予はなさそうだ」

シラサギさんの問いかけに、渋い表情で答えるアマサギさん。

「ここでは危険かもしれない。沢湖さん、すまないがまた、君の家にお邪魔させてもらえないかな？」

「はい、どうぞお〜」

どんな状況になっても、やっぱり水萌は笑顔だった。

水萌の家の居間。

いつもどおり、水萌がお茶を全員分用意してくれる。

今ここにいるのは、あたしたちいつもの面々の他には、アマサギさんとシラサギさんのふたりだけだった。他のSPたちはおそらく外で待機しているのだろう。

水萌も座布団に座ると、アマサギさんが話し始めた。

「先ほどの話についてだが、詳細は伏せさせてもらうが、結果としては交渉決裂となった」

どんな交渉があつたのかも知らないあたしたちではあつたけど、アマサギさんの表情を見れば、それがかなり悪い結果だというのはわかった。

「奴らがいきなり攻撃を仕掛けてくるとは思えないが、危険な状況なのは確かだろう」

そう言つと、彼は傍らに置いてあつたバッグからなにかを取り出した。

それは……えっと、なんだろう。

薄汚れた……ぬいぐるみ？

アマサギさんは、それを水萌に手渡す。

ちよつと、そんな汚いのを水萌の手に触れさせないでよ！

と止める間もなく、水萌自らが手を伸ばし、そのぬいぐるみを抱きかかえていた。

「これ……なんだろう、懐かしい。え〜っと、え〜っと……」

薄汚れた変なぬいぐるみ。水色の毛並みを携えた、猫なのか犬なのか判断がつかないような、微妙なものだったけど。

水萌はそれを懐かしいと言った。

彼女は目をつぶってぬいぐるみを抱きしめ、その温もりを全身に感じて必死に思い出そうとしているようだ。

「変わったデザインなのだ」

「一応猫のように見受けられますですけど、犬のようにもアザラシのようにも、はたまたトカゲのようにも見えますでございます」

猫のようで犬っぽく、アザラシにも見えて、それでいてトカゲみたいなもの、それはな〜に？
って、そんなのわかるか！

「謎の生命体か！？ 宇宙人か！？ こ……怖い……！」

なぜか怯えている土柳。ぬいぐるみだというのに。

う〜ん、さつき少し見直したというのに、やっぱり全然落ち着いてないな、こいつ。

永久にマイナスポイント評価からは逃れられないということか。

と、水萌が目を開いて、いつもどおりゆっくりながらも明るい声を響かせた。

「思い出したあ〜。みい〜ちゃんだよあ〜。猫のぬいぐるみの〜。私が小さい頃、大切にしてたのあ〜」

……やっぱり猫なんだ、あれで。

でも、小さい頃と言っているけど、小学校三年生からいつも一緒に、この家にもよく遊びに来ていたあたしに見覚えがないのだから、それよりもさらに前ってことになる。

水萌は昔、遠い田舎の村に住んでいた、というのを聞いたことがあった。

だけど、どういうわけか水萌にはその頃の記憶がほとんどない。小さかったとはいえ、どうやら小学校に上がるか上がらないかくらいの年齢までは、その田舎の村に住んでいたみたいだというのに。

水萌のことだから、当時から記憶もぼやけていたのだろう、くらいにしか考えていなかったのだけど。

よくよく考えてみれば、ちょっとおかしいような気もする。

「……水萌さんが小さい頃に持っていたぬいぐるみを、どうして今、アマサギさんが持っているのをごいいますですか？」

地花ちゃんが問う。

確かにそうだ。どうしてそんな物を持っていたのか。そして、どうしてそんな物を今、水萌に渡したのか。

「これは、俺たちのボスに渡された物だ。沢湖さんの昔住んでいた家进行搜索させてもらったことがあって、そのときに持ってきたらしい」

「その家は空き家となり長い年月が経っていました。現在では廃屋同然となっていますし、所有権も消失したままとなっています。そのため、搜索させていただきました」

シラサギさんが補足を加える。

「実は、沢湖さんには記憶にガードがかけられているか、もしくは記憶操作が行われたという可能性があるんだ。もちろん確かな証拠はないのだが。ただその場合でも、記憶を完全に操るなんてことはできるはずがない。きっかけがあれば思い出せるはずだと、ボスは考えている。だから、過去の記憶につながるような物を用意しておいたんだ」

水萌の、過去の記憶……。

確かに水萌はほとんど覚えていないと言っていた。それが本当なら、記憶にガードがかけられていたというのも、間違いではないのかもしれない。

でも、そんなことってできるの？

「沢湖さんを爆弾化させてしまった薬同様、もちろん認可されてはいませんが、記憶を操るような薬が研究されていたのは事実だったようです」

再び補足するシラサギさん。

「沢湖さん。他になにか思い出したことはないかな？」

アマサギさんが水萌に問いかける。

ぼーっとした表情になっていた水萌だけど、遠い目をしてつぶやくように口を開いた。

「両親と一緒に、広大な自然に囲まれた田舎の一軒家で暮らしていたのぉ。明るい笑顔を向けてくれる両親に、私も笑顔で応えるのぉ。そうすると両親はもつと笑顔になってくれるのぉ」

「少しずつだけど、思い出しつつあるようだな。これなら、大丈夫かもしれない」

水萌のつぶやきを耳にして、アマサギさんはそう言った。

「大丈夫って、なにがですか？」

あたしは慌てて尋ねる。

なんだか、よくわからないうちに話が進んで、水萌が遠くへ行ってしまうような気がして、あたしは不安になっていたのだ。

「彼女を昔住んでいた家に連れていこうと思うんだ。いきなりすべての記憶が戻るのは危険かもしれないと思っていたが、この様子なら大丈夫だろう。昔の家に行けば、もっとたくさんのことを思い出せるはずだ。そうすれば、もしかしたら彼女の爆弾化した体をもとに戻す方法も見つかるかもしれない」

アマサギさんはそう言うと、あたしたちにこんな提案をした。

「というわけでどうだろう？ 君たち全員で、観光旅行がてら、沢湖さんの昔住んでいた田舎に行くというのは。黒スーツの奴らから一時的にでも逃れられるという可能性もあるしね。もちろん、SPの仕事の一環としてということになるから、費用はこちらで持たせてもらうよ」

「もちろんOKなのだった」

まっ先に返事をしたのはフーミンだった。この子は、あたしたちや水萌本人に断りもなく……。

でもまあ、あたしとしても興味はあったし、水萌の爆弾体質を治せるかもしれないというなら行くしかないとは思っていた。

ちらつ。水萌を見る。

すでにぼーっとした表情から、いつもの表情に戻っていた。（普段からぼーっとした子ではあるけど）

「熱希ちゃん、一緒に行こうよ」

にこおっつ。

笑顔の水萌に、

「もちろんよ！　じゃあ、アマサギさん、よろしくお願いします！」

当然のごとく、そう答えるあたしだった。

のどかな風景が流れていく。

あたしは電車の席から窓の外をぼーっと眺めていた。

新幹線での移動のあと、このローカル線に乗り換えてはや三十分。水萌は、あたしの肩に頭を乗せて眠っている。彼女の体重を感じて、ほのかに温かな気持ちになっているあたしではあったけど。

でも、こうやって寝てしまっていては下手に動けない。あたしには窓の外を眺めているくらいしかできなかった。

水萌の腕には今も、あの蜘蛛型の腕時計が着けられている。そして反対側の腕には宝物と言っていた巾着袋の紐が巻かれている。

バッグにでも入れておけばいいのに、この子はなるべく肌身離さず持っていたいなんて言って、腕に直に巻きつけているのだ。

両腕にそんなのを巻きつけていたら、さすがに気になりそうなものだし、巾着袋の紐なんて血行にも悪そうだけど、水萌は当然ながら気にしていないみたいだった。相変わらず鈍感だわ、この子。

辺りには、みんながカードゲームで盛り上がる声が響いていた。フーミンと土柳兄妹の三人の他に、SPの人たちまで混ざっている。

ふたつのグループに分かれ、カードゲームに興じる面々。SPの人たちまで遊んでいていいのだろうか。

「ま、あいつらにも気を休める時間は必要だからな」

アマサギさんはそう言っていた。

席はふたり掛けのシートが向かい合わせになっていて、あたしの

正面にアマサギさんが、その隣にシラサギさんが座っている。

「でも、あたしたちの分の費用、全部出してもらっちゃって本当にいいんですか？」

「ああ、これでも国家機関だからな。問題はない」

「なんて言って無駄遣いしているのも怒られているのは誰ですか、まったく。……あ、でも今回の件はちゃんと事前申請して許可されますから、安心してくださいね」

アマサギさんの言葉にツツコミを入れるシラサギさん。あたしたちへのフォローも忘れない。

微妙に頼りない感じのあるアマサギさんを、シラサギさんがしっかりとサポートしている、そんな印象を受けた。結構いいコンビなのかもしれない。

ほのぼのとした風景に包まれて、あたしもうつらうつらとしていた。

水萌のことをずっと考えていて昨日はなかなか寝つけなかったからだ。

記憶がガードされていた可能性がある、アマサギさんはそう言っていた。

そんなことが本当にあるのかはわからなかったけど、もしそうなのだとしたら、これから行く場所には水萌が悲しむようななにかがあってもおかしくないのではないか。

そう考え始めてしまったら、あたしたちは本当にそこへ行っているのだろうか、という不安に駆られてしまった。

でも、行くしかない。

黒いスーツの集団が実際にいることを、この目で見ている。今の

ままでも水萌は危険にさらされるだろう。

それならば、彼女を治せる可能性があるのだから、それにすぎるしかない。

そう結論づけたときには、すでに空は明るくなりかけている時間だったのだ。

「眠ってもよろしいですよ。到着したら起こしますから」

そのシラサギさんの言葉に甘えて、あたしは水萌とお互いに寄り添う感じで眠ることにした。

それにしても、

「よゝっし、ウチの勝ちなのだ〜！」

「僕は、また負けたよ……」

「草砂兄は、全部顔に出てしまいますからだと思つのでございませよ」

みんな、元気だなあ。ほんとに観光気分だよ、こいつら……。

ともかく、目的の田舎に着いたらしい。

無人駅を出ると、駅前だというのに周りにはほとんどなにも見当たらなかった。

ちらほらと民家らしき建物は見えるのだけど……。

「今日はもう遅い。沢湖さんの住んでいた家は、ここからさらに奥地までかなり歩いた先にある。夜道は暗くて危険だし、今日は旅館

に泊まって明日出発しよう」

アマサギさんの先導で道を歩く。

まだ夕方とはいえ、都会ならばそろそろ街灯に明かりが点き始める時間だ。でも、この辺りには街灯なんて見当たらなかった。

アマサギさんによれば、すでに旅館の手配はしてあるとのことだった。もともと一泊してから出発するつもりだったのだろう。

部屋はふたつ取っており、女性と男性で分かれるという。

SPはシラサギさん以外みな男性で、アマサギさんを除くと男性SPは全部で三人だけ。

あまり大勢では目立つからという理由で、少人数での行動になったようだ。

サングラスをかけたスーツの集団なのだから、この人数でも充分目立ちそうなものだけだ。

とはいえ、ほとんど人通りのないこんな田舎道では、少人数だろうがなんだろうが、あまり関係なかったかもしれない。

それにしても、本当にこんなところに旅館があるのだろうかと心配になるほど、周りには田畑や林しか見えなかった。

もちろん田畑があるということは、農家が近くにあるということなのだろうけど。

辺りも暗さを増し、虫たちの輪唱が響くようになった頃、ようやく旅館らしき建物が見えてきた。

「あそこだ」

「言われるまでもなくわかるのだ。他に明かりの点いてる場所なんて、全然ないのだよ」

フーミンが悪態をつく。かなり疲れているようだ。

小柄で体力もない上に、電車内ではしゃぎすぎたからだろう。

ともかく旅館に着いた。

旅館は、ボロかった。

でもその分、広かった。

「いやいやいや、こつたら田舎に、ようこそいらつしやったのお。駅からも遠かつたろう？ 送迎でも出せればいいのじゃけど、人手も足りんでのお。」

旅館に入ると、人のよさそうな女将さんが出迎えてくれた。

夏休みとはいえ、観光客が来ることもあり多くない田舎の旅館。あたしたちの他に客はいないみたいだった。

「十人くらいまで泊まれる大部屋をふた部屋用意してありますんで、存分におくつろぎくださいませし。」

男性五人、女性五人で、それぞれ十人部屋を使えるなんて。

こんなにボロくて他に客がないとはいえ、すごく贅沢なことなのかもしれない。

沈み気味だったあたしのテンションも少しずつ上がってきているのが、自分でもよくわかった。

確かに、すごかった。

……部屋のボロさの度合いが。

こういうところって、せめて女性陣の部屋だけは綺麗だったりするってのが、お約束じゃない？

でも、そんなのまったく関係ないと言わんばかりに、ボロボロの部屋だった。

うん、確かに広いよ。空間的には十人入ったってそりゃあ大丈夫だと思うよ。

だけど、床にぽっかりと大穴が開いているって、どういうこと？
こんな部屋に、あたしだけならともかく、水萌まで泊まらなきゃならないなんて。そんなのひどすぎる！

いきり立つあたしの思いをよそに、当の水萌本人は「わあ、すごい、アスレチックみたあーい！」なんてはしゃいでいた。

旅館でアスレチックって、ありえないから！ もう、なんでこの子はいつも、こんなにのん気なのだろうか。

とはいえ、だからこそ爆発せずに、今まで生きてこられたのかも
しれない。

……って、あたしはなんて物騒なことを考えているんだ！

「これはこれで情緒溢れる感じと思えば、悪くはないかもしれない
ございます。床は抜けていますですが、壁はしっかりしている
みたいでございますよ」

「そうですね。床の穴も、上手く避けて布団を敷けば余裕で全員寝
られますし。夜中、トイレに起きた場合は、少々足もとが心配では

ありますが……」

さすがのシラサギさんも、こんな状況だとは聞いていなかったように若干不満顔だったけど、そこは大人だからなのか文句を胸のうちに仕舞っているようだ。

その仕舞った文句は、あとでアマサギさんに容赦なくぶつけられるのかもしれないけど。

「おゝ。窓から見える景色は、なかなかの絶景なのだ！」

部屋はふたつに区切られていて、障子で隔てられた小部屋があった。そちら側の窓から、確かに綺麗な景色が見渡せる。

部屋には他になにもなく、トイレも部屋の外の廊下を歩いていった先にあるようだ。

と、窓から外を眺めていた地花ちゃんが明るい声を上げた。

「あつ、あれ！ 露店風呂ではございませんか？」

「おゝ、ほんとだ。こんなボロ旅館にしては、すぐくまともな感じじゃない！」

といったわけで、あたしたちはさっそく露天風呂へと向かい、今日一日の疲れを癒そうと考えた。

お風呂へ向かう途中、男性陣とばったりと出くわす。

彼らも露天風呂に向かっていたのだ。とはいっても、もちろん混浴ではない。

「土柳たち、のぞいたら殺すのだよ！」

「あのなあ！ のぞくったって、それじゃあ……」

土柳の視線をたどると、そこはフーミンの胸……。

「あらあゝ、そんなペツタンコな胸じゃ見ても仕方がないゝ、なんて思ってるのおゝ？」

ああ！ 水萌ってば、そんなホントのこと言っちゃダメだつてば！
フーミンの胸は正直べったんこで、彼女はそれをすごく気にしているのだ。

「むう、土柳っち、気にしてるのにひどいのだ！ それにその言い方だと、熱希ちゃんならのぞくって言ってるみたいなのだよ！」
「そ……そんなこと言ってない！」

と言いながらも、土柳の奴の視線はあたしの胸のほうへ……。あたしは腕で胸を隠すようにしながら、奴に蹴りを入れる。

「見るな、バカ！」

確かにあたしは胸が大きめだった。
フーミンほどではないにしても、ちよつと控えめな大きさの水萌にも、「いいなあゝ」なんてよく言われるけど。
絶対よくなかない。邪魔だし、じろじろ見られるし、いいことなんてないじゃないか。

そんな様子を見ていたアマサギさんとシラサギさんに、

「楽しい仲間たち、つて感じたなあ」
「ほんと、若いっていいわね」

なんて微笑ましく言われてしまったのだけど。
ともかく、あたしたちは露天風呂へと向かった。

脱衣所で服を脱ぎ、タオルを巻いたあたしたちは、お湯の中へと一直線。

さあ！ 泳ぐぞー！

なんて言ったら、みんなに子供だつて笑われた。

むー、でも広いお風呂なら、泳ぎたくなるものだよね？ ね？

「うーん、極楽極楽」

「熱希ちゃんは、やっぱりおばさんっぽいのだ」

「さつきは子供みたいだったのにいー、熱希ちゃんって、面白いわあー」

「あんたに面白いと言われたくないわ」

「でも、極楽つて言いたくなる気持ちもわかりますでございますよ」

「そうですね。お湯が柔らかい感じで、とても気持ちいいわ。あなたたちみたいに、すべすべのお肌に戻るかしら」

「あらー、シラサギさんはー、まだまだ若くて綺麗だと思いますよあー」

「そう？ ありがとう。でもねえ、ちょっと乾燥気味なのよね、最近」

なんて他愛ないお喋りをしつつ、あたしたちは露天風呂を楽しんでいた。

屋外だから、たまに風がそよぎ周囲の木々を揺らす。

お風呂の周りは竹で作られた柵で囲っており、見られたりはしないようになっていた。

でも完全に覆われているわけではなく、湯船から近いところは柵

で囲われているけど、少し離れると一部は自然の林のままになっているようだった。

そちら側は山になっておりますからのおく、のぞかれたりする心配なんてないんですわゝ、と女将は言っていたけど。

本当に大丈夫だろうか。ちよつと心配だったりして。

ふと気づく。

旅館には、あたしたち以外の客はいなかった。また、女将を含めた宿の人は、客の入れる時間帯には露天風呂には入らない決まりになっ

にもかかわらず。

今お湯に浸かっている人影……。

湯気で顔なんて全然見えないし、みんなの声がしているから気にしてなかったのだけど。

あたしは、おそるおそる数えてみた。

「一、二、三、四、五、六……」

「熱希ちゃん、どうしたのだ？」

「今この露天風呂に入ってる人影を数えたの……。全部で六人……」

「え？
……ええ
~~~~~！？」

「おかしいでございます。わたくしたち五人しか、女性の客はいなかったはずでございますよ」

「そんな！ 誰か忍び込んでいるというのですか？」

声はあたしたち五人だけ。でも人影は六つ。

明らかに喋らないで湯船に浸かっている人がひとり、紛れ込んで  
いる！？

「それって、のぞきですか!？」

「のぞき以上の大胆不敵さなのだ！ 混浴でもないのに一緒に入っているのだよ！」

「きゃ~~~~、でございますですよ~~~~！」

……なんか、余裕のある悲鳴だね、地花ちゃん。

「ふえ~~~~、なにに、どうしたの~~~~？」

よくはわかっていないみたいだけど、慌てているらしい水萌の声も聞こえる。

もう、なんだってこんなに湯気がすごいよ、ここは！

「お……おい、どうした！？」

不意に土柳の声が響く。

あたしたちの大声や地花ちゃんの悲鳴が聞こえたからか、男性陣も心配して集まってきたらしい。

「あつ、あんたたちがのぞいてたの！？」

「へ？ 違う違う！ 僕たちは今さっき男湯のほうから上がって、部屋に戻るところだったんだよ！」

相変わらず湯気がすごいため周りはよく見えなかったけど、土柳も、アマサギさんも、もちろん女将さんや旅館の人たちも集まってきているようだった。

「あゝ、それはもしかすつとおゝ……」

女将さんがなにか言いかけたとき、強めの風が吹いた。風は湯気を一瞬で吹き飛ばす。

湯船に浸かっていた六つめの影は――、

「ウキッ？」

林のほうから入ってきたのだろう、一匹の猿だった。

「山から下りてきた猿が、ときどきこうして湯船に浸かっているのですわ。だから、完全に柵で囲っていないんですよ。いやあ、最近少なかったもので、すっかり忘れておりましたわ」

女将さんの説明に、やっと安堵の息をつく。

そこで、はたと気づいた。

あれ、そういえば土柳とかアマサギさんも、駆けつけてきてたんじゃ……。

風で辺りの湯気はすっかり晴れていた。

慌てて湯船から飛び出したあたしたちは、それぞれタオル一枚を巻いただけの姿で立っている。

そして、周囲には女将さんたちとともにこちらを視線を向ける浴衣姿の男性陣――。

「だ~~~~~~~~！ あんたら、早く出てけ~~~~~~~~！！」

心配して来てくれたんだろうに、ひどい言い方だと思わなくもなかったけど、この場合当然の反応だよね？

あたしが手近にあったオケを投げつけたせいで、見事にそれがク

リーンヒットして、土柳の奴がぶっ倒れていたけど。  
これも仕方がないことだよね？　ね？

「あゝ、昨日は散々だったわ」

「それはこっちのセリフだ！」

土柳が右目の上にガーゼを当てて応急処置をした顔で怒鳴ってくる。

そんな剣幕で怒らなくてもいいじゃん。

「いやいや、当然だと思うのだ」

「そ……そうかなあ？」

「草砂兄、痛々しいのでございます」

「痛い痛い、飛んでいけえ」

「あ……いや、べつにもう痛くはないんだけど。でも、ありがとう沢湖さん」

「いえいえ、どういたしましてえ」

にこお。

水萌が絡むと、どんなにもめていても道中は和やかムードに早変わり。さすがだわ。

「そういえば、昨日の夜はどうだったんですか？ 黒いスーツの男たちの気配とか……」

あたしが心配していたことを尋ねる。

今一番危険なのはあの組織の人たちだろうと考えていたからだ。

「ああ、どうやら周りには感じられなかった。俺たちがここに来ていることに、まだ気づいていないのかもしれない。とはいえ、すぐ

に足取りを追ってくることも考えられるから油断は禁物だ」  
「でも、今はまだ大丈夫ってことですね」

あたしは少し安心した。

やっぱりずつと気を張ったままでは疲れてしまふ。それでは、いざというときに水萌を護れないかもしれない。

せめて今だけでも気を楽にしておこう。

そんな考えを胸に、あたしは額に浮かんだ汗を拭う。

あたしたちは今、田舎の寂しげな道を歩いていた。

もちろん水萌が昔住んでいたという、村外れにある家へと向かうためだ。

どうでもいいけど、ほんとに寂しい田舎道。なんというか、ほとんど民家すら見えなくなっているような。

仮にも水萌が昔住んでいたところのはずなのに、どうしてこんなにも寂しいのだろう。

「水萌の住んでいた辺りって、昔は賑わってたけど今では寂れてしまったとか、そんな感じなんですか？」

「……いや、そういうわけじゃない。……もともとかなり村から外れた場所に家を建てていたんだ」

あたしの問いにアマサギさんが答えてくれたのだけど。

少し言いよどむ様子があったから、ちょっと気になった。

そんな表情を感じ取ったのだらう、アマサギさんが言葉をつけ足す。

「俺からいろいろと話すより、沢湖さん自身に思い出してもらいたいんだよ。そのほうが、他のことを思い出すのも早くなるかもしれないからな」

なるほど、そういうことか。

「水萌、どうなの？ この辺りの景色とか見て、なにか感じたりする？」

「ええ〜？ う〜んとねえ〜。ん〜……。べつになにもお〜。ごめんなさい〜」

謝ることじゃないってのに、ぺこりと頭を下げる水萌。あ〜もう、この子ってば！

思わずあたしは彼女を抱きしめていた。

「謝らなくていいから！」

「熱希ちゃん、暑い〜」

「こんなところまで来ても、やっぱり相変わらずなのだ、このふたり」

「うん、相変わらずだ」

「相変わらずなのでございます」

相変わらずなあたしたちだった。

それにしても、いったいどこまで行くのだろうか？

正確な時間はわからないけど、もう随分と歩いてきた気がする。

旅館を出てから、二時間くらいは経つのではないだろうか。

もちろん、かなりの時間がかかることは予想していた。

旅館を出るときに、お昼用のおにぎりと冷たい麦茶を入れた水筒

が人数分用意されていたからだ。

アマサギさんがあらかじめ宿の人に言って用意してもらったらしい。ということは、さくつと行って調べて戻ってくる、というわけにはいかない距離だと想像できる。

もっともそうでなければ、旅館に一泊なんてしていないだろうけど。

でも、さすがに疲れた。

あたしですらそう思うのだから、おっとり気味の水萌や、小柄で体力もないフーミン、小学生のような外見の地花ちゃんには厳しいだろう。

さつきから、ほとんど喋る気力すらなくしているようだった。

さすがに休憩を挟んだほうがいい、そう判断したあたしは、アマサギさんに声をかけた。

「アマサギさん、すみません。ちょっと休憩させてほしいのですが」「ん、ああそうか、そうだな。すまない、考え事をしていてみんなの様子を見ていなかった。それじゃあ、その辺で休みながら、食べられるようならおにぎりでも食べようか」

ちょうど大きな木の切り株がまるでテーブルにしてくれと言わんばかりにそこにあった。

周りの木々によって日差しも遮られ、休むにはうってつけの場所だ。

「この先、まだ結構歩くんですか？」

「うん……どうだろうな。実は俺も正確には覚えていないんだが……」

「そんな無責任な！」

先導しているから、てつきり道はわかっているものとばかり思っていたのに。

「大丈夫ですよ。一応方位は確認しています。現実とは言えないかもしれませんが、おそらくこちらで合っているはずですよ」

シラサギさんがフォローするものの、それでも完全ではなさそうだった。

「沢湖さん、どうかな？ この辺りの景色に見覚えはないかな？」

「ええ〜つとあ〜……。あ……うん〜、なんか、わかる気がする〜」

水萌、本当に大丈夫？ あたしは少し心配だったのだけど、ここは任せよう、というアマサギさんの判断により、その後は水萌の先導で道を進むことになった。

「あれえ〜？ う〜〜ん、こっちなあ〜〜？ 違うかもお〜〜？」

とっても不安なナビゲーションに続いて、ただついていくだけのあたしたち。

「水萌ちゃん、大丈夫なのだろうか？ ウチは不安なのだよ」

フーミンがそう言うのも無理はない。

それでも、アマサギさんやシラサギさんはなにも言わずに水萌に先導を任せている。

閉ざされた記憶を引き出すため、ということなのだろう。

「きつとこつちかな。なんとなくこつちにしてみよ。うん、どつちかな。天の神様の言うとおりい」

すでに先導の役目を果たしていないでしょ、とツツコミを入れたくなるような言葉をつぶやきながら、水萌は進んでいく。

あたしたちは無事に生きて戻れるのだろうか。そんな不安が頭をよぎり始めていた。

と、突然目の前の視界が開けた。

「あ……あつたあ……!!」

そこには、古ぼけてホコリだらけになっている、大きな木造の家が建っていた。

先導していたはずの水萌が一番驚いたような声を上げていた気がしたけど、そんなことはどうでもよかった。

あたしは水萌と一緒に運命をともにしてこのまま目的地までどり着かずに朽ち果てようとも構わない、なんて諦めの境地にまで入っていたのだから。

ふ、とりあえず助かった。

もちろん、帰りはどうなるの？ という心配はまだあったのだけど。

ともかくあたしたちは、その家へと駆け寄った。

家の中は、ところどころ床板が腐って割れていたり、柱や天井の一部が崩れていたり、といったひどい有様だった。

でも全体的に家の形は保っていて、時間が経っているのは確かだったけど、生活感があつたこともなんとなく感じられた。

部屋には電球がついていたけど、さすがに今では電気が通っていないように明かりは灯らなかった。

まだ昼過ぎくらいの時間で天井や壁の隙間から日差しもこぼれてくる。少々薄暗くはあるものの、調査する分には、さほど問題はないだろう。

「さすがに、歩きづらいわね」

なんてあたしが言った途端に、

「きゃっ」

水萌が抜けた床板に足を引っかけたのか、転びそうになる。

すぐそばにあたしがいたから抱きとめてあげられたけど、そうじやなかったらトロいこの子のことだから、豪快に顔面から床に激突していたかもしれない。

まったく、世話が焼けるんだから。

「ありがとう、熱希ちゃん」

「もう、気をつけなよ」

そう言いながらも、あたしは彼女と手をつないだまま歩き出す。

「うーん、やっぱりいつもどおりの光景なのだ」

そんなフーミンの茶々にも、もう慣れっこだった。

それにしても、家の中は本当にホコリだらけで、思わず咳き込んでしまうほどだった。

こんな中にいたら水萌が具合を悪くしてしまうかもしれない、なんて心配をしていたのだけだ。

あたしの心配とは裏腹に、彼女の瞳は、どんどんと輝きを増しているように思えた。

「水萌さん、なんだかとても嬉しそうでございます」

「うん、なんか、懐かしくて」

そう言いつつ、危なっかしい足取りながらも、水萌は気持ちを抑えられないという感じで歩き出した。

もちろん手をつないだままのあたしも、それに続く。

つまり転びそうになる水萌をあたしが支えながら、歩きにくい部屋の中を進む。

他の人たちもみんな、あたしたちのあとに続いていた。

昔水萌が住んでいたというこの家。今でこそ薄汚れた廃屋になっているけど、どうやらかなり広いようだ。

木造ではあるものの、こんな田舎にあるにしてはかなり豪華な家だったのではないだろうか。

水萌ってもしかして、ものすごいお嬢様だったのかな？

そう考えると、彼女があんなにトロいのも頷ける気はするけど。

でも、お嬢様ってイメージじゃないわよね、この子。

やがて、とある部屋で水萌は足を止めた。

あたしは周りを見回してみる。そこは、どうやら食堂のようだった。奥には仕切りがあつて、その先が台所になっているらしい。

食堂だけでも結構な広さがあるから、やはりこの家はかなり豪華だったのだろう。

今では広さ以外にそれを感じられる面影はほとんどないのだけど。

そこで、ふと気づく。

つないでいる水萌の手が、小刻みに震えていることに。

「水萌？」

「ああ、そうだわあ……。思い出してきたあ……。……」

遠い目をして水萌がつぶやき声を漏らす。

「あたしはここで、両親と一緒に住んでいたの。でも、いつも四人だったわあ……。……」

「え？ 四人？」

両親と水萌なら、三人だ。あとひとりって、他に兄弟がいたってことだろうか？

「うんとね。両親の知り合いのおじ様が、よく遊びに来ていたの。それこそ、毎日のように来ていた気がする……。……」

そしてまた、なにかを思い出したのか、水萌は別の部屋へと歩き始める。

もちろん彼女の手を握ったあたしを筆頭に、みんなもそのあとに続く。

トロい水萌に合わせて歩くため、ゆつくりなことこの上ない。  
このペースだとすぐ時間がかりそうだけど、それは仕方がないことだろう。

でも、ここに昔、水萌が住んでいたのね……。  
そう考えると、あたしにとっても感慨深い。水萌のことなら、なんでも知りたいと思っているのだから。

ゆつくりながらも、また別の部屋まで歩いていき、水萌は足を止めた。

そこは……なんだろう。薄汚れた机があつて、その上にいろいろな物品が散乱していた。

ぱつと見渡した限り、ガラス製品が多いような気もする。

なんとなく、見覚えのあるようなものがたくさん転がっているよ  
うな……。

あつ、割れているけど、あの球体のようなガラスの破片は……フ  
ラスコ？

そう思い至ると、他にも、ビーカーや試験管、ピンセットなど、  
学校の化学室にあるような器具が散らばっているように思える。  
もちろん、見たこともないものも混ざってはいたけど、でも、こ  
の状況から考えると、ここは……。

「思い出したわあ〜。ここで、両親とおじさんは三人で、研究  
していたのぉ〜」

「研究つて、いったいなんなのだ？」  
「沢湖さんの両親は、ここで薬品の研究をしていたんだ。前に話し  
た爆弾化してしまう副作用を起こした薬も、その研究で作り出され  
たものだった。つまり、自ら作った薬を自分の娘に投与したんだ。  
娘を救うために」

フーミンの疑問に答えたのは、アマサギさんだった。

「実は沢湖さんは、衰弱死するほど弱っていたわけではなかった。だが、感情がまったくなくなかったんだ。人間としては、それは死んでいると同じこと。両親は悩み、それを改善する薬を開発して投与した。それによつて、沢湖さんは笑顔も他の感情も取り戻したんだ」

解説を聞いても、フーミンは渋い表情のままだった。

「……なぜ、衰弱死から救う薬だなどと、嘘をついたのだ？」

「両親の記憶などにもつながる内容だから、記憶のガードがかかっていたり操作されていたりといった場合に、悪影響が出ないとも限らない、そう考えたんだ」

アマサギさんの答えに、フーミンもどうにか納得したみたいだった。

それにしても、ここで両親と住んでいたという水萌。

彼女の両親は亡くなったと、あたしは聞いていた。

だけど、記憶がガードされていたり操作されていたりしたのなら、その記憶も事実とは違う可能性があるのではないだろうか？

あたしは、その疑問をアマサギさんにぶつけてみた。

「完全には言いきれないが、おそらくそれはないだろう。彼女の両親は、死んでいるはずだ。ただ、正確に言えば……」

そこで一瞬、声を止めるアマサギさん。なんとなくあたしは嫌な予感がして、その先を聞きたくないと思った。

でも彼は構わずに、そのあとの言葉を続けた。

「正確に言えば、殺されたはずだ」

両親が殺された――。

さすがにそれは、水萌にとってショックだったのだろう。

ふらりと、彼女の体が倒れかける。

素早くあたしが支えると、「ありがとう」と力なくつぶやいて、彼女はあたしの腕につかまりながらも再び自分の足で立ち上がった。

「とはいえ、こちらでも完全に把握はしていない。それを確かめるためにも、この家の詳細な調査が必要だったんだ。沢湖さん、もっと他に思い出したことはないかい？ この部屋が研究室だったとしても、すべての設備がこれだけとは思えないんだ」

アマサギさんは、水萌を問い詰めるように声を上げる。

両親のことを聞いてショックを受けている水萌の気持ちも、少しは考えてほしいと思ったのだけだ。

あたしが文句を言うよりも早く、水萌が口を開いた。

「そうだわ。地下に、秘密の研究室と倉庫があるって聞いた気がする。ほとんど使ってなかったけど、大切な物はそこに仕舞ってあるって。あたしは入ったことがなかったと思うけどお」

「おお、それはどこにあるんだ？ 思い出せるかい？」

水萌の肩に手をかけて揺するように迫るアマサギさん。

さすがにあたしは、彼の腕をつかんで水萌の肩から引きはがす。

「ちょっと、やめてください！ 水萌に触らないで！ 水萌だって思い出そうとしてるんだから、そんなに急かさないでください！」

その声で、はっと我に返るアマサギさん。

「あ……ああ、すまない。取り乱してしまった。しかし、その場所がわかれば、すべてが解決するかもしれないんだ」

「そうですね。沢湖さん、つらいかもしれませんが、思い出してください」

とりあえず落ち着いたアマサギさんだったが、その横にいたシラサギさんも、そう言っただけで水萌を急かした。

「うん、えっと、多分、こっちです」

彼女の先導で、あたしたちは再び歩き出した。

「ここだと、思うのぉ」

そう言っただけで彼女が指差したのは、さっきも通った食堂の片隅の床だった。

アマサギさんが素早く屈み込んで床板を調べる。巧妙に隠されていたつなぎ目をずらすと、床板が外れて石造りの階段がその姿を現した。

「こんなところに隠してあったとは。よし、とにかく下りるぞ」

アマサギさんを先頭に、SPの人たちが階段を下りていく。それに続いて、あたしたちも地下室へと下りた。

地下室には明かりなんてあるわけがない。電気も通じていないのだから、真っ暗なのではないだろうか。そう思ったのだけど。

用意のいいことに、SPの人たちはみな小型の懐中電灯を持っていた。今はそれで辺りを照らしている。

もちろんそれだけでは、調査するには不十分だろう。そう思えるほどの薄暗さ。

でも彼らは、さらに用意のいいことに、いくつかの電池式ランプを素早く配置していた。

どうしてそんな物まで用意していたのだろうか？

もちろん、いざというときのために、明かりはあったほうが良いと思うけど。

それにしても、さすがにここまで用意周到だと、最初から地下室があることを知っていたのではないかとすら思えてしまう。

ぎゅっ。

あたしの横で、つないだままだったあたしの手を強く握りしめた水萌が、不安そうな表情を浮かべながら、こうつぶやいた。

「お父さんお母さんの思い出が、汚されちゃう……」

あたしは、彼女の手を強く握り返した。

歡喜の表情を浮かべて、地下研究室とその奥の倉庫を探っているアマサギさんたち。

あたしたちのそばでは、地花ちゃんがやはり渋い顔をしていた。

「もしかしたらわたくしたちは、とんでもないことをしてしまったのかもかもしれません」

「うん、僕もそう思う」

「確におかしいのだ。この人たちは、水萌ちゃんのご両親の研究を、土足で踏み荒らしている気がするのだ」

あたしたちの思いは、ひとつになっていた。

今の状況は、明らかにおかしい。でも、そう考えながらも、現状をどうすることもできないでいた。

そんなあたしたちの表情を見て取ったのだろう、アマサギさんがこちらに顔を向ける。

その顔は、ランプの光のせいなのか、あたしたちの気持ちの問題なのか、醜く歪んでいるようにさえ思えた。

「ふっふっふ、ごくろうだったね、君たち」

ゆっくりと、アマサギさんは口を開いた。

「秘密の研究室があるのではないかというのは、以前から考えていたんだ。この家も何度か調査していたんだけどね、どうしてもこの場所を見つけれなかった。だけど君たちのおかげで、こうして有効な資料の数々に出会うことができた。礼を言うよ」

「……ここにある資料で、水萌を治すことができるんですよね？」

なんとなく、彼らの目的がそこにはないことを感じながらも、あたしは訊いた。

「そうだな、そういう資料もあるかもしれない。だが、それよりも我々にとって有効な資料が、ここにはあるはずなんだ」

そう言い放つアマサギさんの瞳からは、これまであたしたちに向けられていた、君たちのことは護るよ、という優しい雰囲気は微塵も感じられなかった。

「……水萌ちゃんを護るためのスマイルプロジェクトという国家機密組織……そのアマサギさんたちにとって、水萌ちゃんを治すこと以上に有効な資料って、いったいなんなのだ？」

フーミンが、身構えたまま尋ねる。

おそらくは彼女も覚悟しているのだろう。返ってくる答えが、あたしたちにとってよくないものになるということ。

「ふっふっふ。もうなんとなく気づいているんじゃないか？ まあ、俺の口からはつきり言っちゃろう。俺たちは国家の機密組織なんかじゃないってことさ」

「騙していたのでございますか！？」

「そういうことになるな」

地花ちゃんの言葉をあっさりと認めるアマサギさん。

「とりあえず、ちゃんとした調査は後でいいだろう。適当にいくつかの資料を持ち帰って報告するぞ。おい、こいつらを捕まえろ！」

アマサギさんの声に、SPの人たち……、いや、SPではないってことになるのか、ともかくグリースーツの男たちが動く。

彼らは怪しい、それは感じ取っていたあたしたち。

とはいえ、所詮は大人と子供。あたしたちがまともに抵抗できるすべは、なかった。

あたしたちは男たちに捕まえられ、後ろ手にロープで固く縛られる。

男たちはそれぞれのロープをしっかりと握って、あたしたちが逃げ出さないように取り囲んだ。

「くっ。水萌に変なことしたら、許さないからね！」

こんな状況ではあったけど、あたしは奴らを睨みつけて怒鳴った。危険があるかもしれない。それはわかってはいたけど、あたしにとっては自分よりも水萌のほうが大切なのだ。

「相変わらず威勢のいい子だ。安心しろ、とりあえず今は危害を加えたりするつもりはない。お前たちは本部に連れて帰る。ボスへの土産としては資料だけでもいいんだけどな。生きた実験体も喜ばれるだろう」

あたしたちは地下室から連れ出されると、水萌の住んでいた古い家を離れ、田舎の山道を歩かされた。もちろん縛られたまま。

歩かせるために足までは縛られていなかったものの、こんな方角もわからない山道では、仮に逃げたとしても助けを呼ぶ前に迷って力尽きてしまいかもしれない。

それに、水萌を残して自分だけ逃げるなんて、そんなことあたしには絶対にできなかった。

彼らは黙々と歩いていた。

いくつかの資料を小脇に抱えたアマサギさんを先頭に、シラサギさんも資料を持ってその横に並んで歩いている。

その後ろに手下のグレースーツの男たちが並び、あたしたちを縛ったロープを引っ張っている。

ふと地花ちゃんに視線を向けると、泣きそうな表情になっていた。

「大丈夫だよ、地花ちゃん。あたしたちがついてるから、ね？」

あたしは彼女を元気づけてあげようと、そう言った。

でも、彼女は怖がっているわけではなかった。

「いえ、違うのでございます。今さらではございますけれど、最初にアマサギさんを捕まえたときから、おかしいとは思っていたのでございます。いくら不意打ちを食らったからとはいえ、子供のわたくしたち相手に、あっさりと捕まって神妙になっておりましたですし……」

地花ちゃんは小声で語る。

小声とはいっても、おそらくアマサギさんたちにも聞こえていただろう。だけど、彼らは口を挟まなかった。

「その後もずっと注意して見ておりましたのですが、このところつ

いつい油断してしまっていたのでございます。わたくしがもつとすっかりしていたならば、こんなことにはならなかったかもしれませんのでございます。ごめんなさいなのですよ……」

涙をぼろぼろと流しながら、地花ちゃんは後悔の言葉をしぼり出していた。

「地花ちゃんのせいじゃないよ……」

「そうだぞ」

彼女を慰めるあたしの言葉に、土柳も言葉をつなぐ。

「そうそう。全部土柳が悪いんだから！」

それが土柳だったからか、思わずいつものノリが出てしまっあたし。

「なんでだよ！」

素早くツツコミを入れてくる土柳。

「きやははっ！　うちらの中で唯一の男の子なのに、全然頑張ってくれないからなのだ！」

「むむ、僕は僕なりに頑張ってるんだぞ！？」

「えゝ？　そうなの？　でも絶対目立ってないよね、土柳って。中学生の地花ちゃんのほうがあたしたちの仲間ってイメージが強いくらいだし。土柳は、いわばオマケって感じ？」

「オマケって、さすがにひどいだろ！？」

「うふふ。オマケつきのお菓子は、大好きよぉ」

水萌が相変わらず、すつとぼけたことを言う。

そんなやり取りを聞いていたからか、地花ちゃん表情もいつの間にか緩んでいた。

と、前方からツツコミが入る。

「おいおい、捕まってるってのに、うるさい奴らだな」

グレースーツの男が黙っていらなくなり思わず口走ってしまっただよう。

「こら、口を挟むな。さて、もうすぐ着くからな」

男を叱責するアマサギさんの声。

その言葉に合わせたかのように視界が少し開け、山あいの森の奥にあるこんな場所に、高く青々と繁った木々に覆われた一軒の洋館が姿を現した。

薄汚れた感じで、ちょっと怖い印象さえ受ける。

「あ、ここは……」

水萌がつぶやいた。

「思い出したわあ。何度か遊びに来たことがあったの。ここは、おじ様のおうちだよ」

屋敷の中は、少し薄汚れた印象の外観からは想像もできないほどの豪華さだった。

手入れも行き届いているようで、かなり綺麗だ。

入り口の両開きの扉の中は広い玄関ホールになっていて、幅の広い絨毯敷きの階段が二階へと延びていた。

こんな田舎の山奥に、こんな洋館があるなんて……。

あたしたちはロープにつながれたまま階段を上り、二階の一室へと通された。

そこは異常なほど広い部屋だった。

部屋の中央にはテーブルがあり、その四隅にそれぞれふたり掛けの黒い革製のソファが置かれている。

隅に置かれた豪華そうな食器棚には、ワイングラスが並べられていた。

部屋の奥側には机が置かれ、そのさらに奥にはゆつたりとした、やはり黒いソファータイプの椅子が見える。こちらはひとり掛けのようだ。

そしてその椅子に座る人物が、わずかに微笑みをたたえながら、あたしたちを出迎えた。

「よくここまで来ましたねえ、みなさん。長旅お疲れ様でした。ふおっふおっふお」

ワイングラスを片手に豪華そうなガウンを身にまとった四十代くらいと思われるおじさんが、不快感すら覚えるような笑い声を上げ

る。

あらかじめ通信連絡をしていたみたいだし、クーラーで冷えた部屋の中で、ゆったりと椅子に座ってあたしたちの到着を待っていたのだろう。

あたしたちはロープで縛られたまま、相変わらずグレースーツの男たちに捕まっている状態だった。

その彼らの横に並ぶように、アマサギさんとシラサギさんも控えていた。

そしてそんな状況の中、水萌が一步前に出る。

「氷室のおじ様、お久しぶりですう」

水萌の声に、氷室のおじ様と呼ばれたオヤジは一瞬驚きの表情を浮かべた。

「ほう、水萌ちゃんは記憶が戻ったんだね。やはり当時のわしの研究はまだまだだったということか」

氷室はそうつぶやいて、ニヤニヤと下卑た笑みを浮かべながら水萌の全身に視線を這わせる。

「大きくなりましたねえ。美しい女性に成長したものです」

「いやらしい目で水萌を見るな、エロオヤジ！」

思わず叫ぶあたし。

その声に反応し、氷室の視線がこちらへと向く。

「お友達は少々うるさそうですが、体型としてはとても女性らしいですねえ」

奴のいやらしい視線が、あたしの胸の辺りに向けられているのがわかった。

ロープで縛られているから、手で隠したりもできない。あたしは身を横にひねってその視線から逃れる。

「どういうことなのか、説明してもらいたいのだ！」

フーミンが助け舟を出してくれた。

「そうです。おじ様、どうしてこんなことを？」

水萌も眉をつり上げて氷室を睨みつけている。

ああ、怒った顔もらぶりいだわあ……って、そんなこと考えている場合じゃない！

「ふおっふおっふお。冥土の土産がほしいってことですか？ まあいいでしょう、お話して差し上げましょう」

冥土の土産なんて言うってことは、あたしたちはやっぱり消されるのね……。

そんな思いに囚われているあたしの沈んだ表情を見ても躊躇することなく、むしろそれを楽しんでいるかのように、氷室は語り出した。

奴の名前は氷室霜雪<sup>ひむろしもゆき</sup>。

そんな小洒落た名前なんて似合わない、あたしは思ったのだけど。

ともかく、氷室は水萌が思い出した記憶のとおり、彼女の両親とともに研究していた同志だった。

お互いに競い合っていた時期もあったけど、氷室はやがて、協力したほうが効率的だと水萌の両親に提案した。

その当時、氷室の家よりも水萌の家のほうが研究設備としての質が高かった。氷室の狙いは、そこにあったのだ。

もちろん水萌の両親にしても利点はある。氷室の知識は多岐に渡り、研究を続ける上で有効だった。

そして三人は協力して様々な研究をした。

こんな片田舎で研究する無名の科学者だった彼らも、やがてはその成果が認められ、国からも目をかけてもらえるようになった。

研究に必要な資金を援助してもらったり、貴重な素材を提供してもらったり。

そして三人が研究する中には、記憶を操作する薬もあった。氷室が主導して研究していたのがその薬だった。

国はそれを止めようとした。記憶操作の研究は危険をはらむと判断されたのだろう。

国からの圧力、逃れられはしない。氷室は言われたとおり研究を中止した。

……表向きは。

普段から水萌の家で研究していたため、氷室の家のことは国に知られていなかった。

山奥の木々のあいだにひっそりと建っている館だということと、研究中はほとんど水萌の両親の家に寝泊りしていたから、というの

も幸いしたのだろう。

氷室は自宅で極秘の記憶操作研究も続けながら、表向きは水萌の両親との共同研究に従事していた。

そんな折、水萌がこの世に生を受けた。両親は、娘をそれはそれは可愛がった。氷室も水萌のことを可愛がっていたという。

でもどういうわけか、水萌はまったく笑わなかった。感情がなかったのだ。

もちろん、生まれてすぐの病院では産声を上げ、抱き上げる母の顔を見て笑い声も上げていた。

それなのに、いつの頃からか、まったく感情を示さなくなってしまった。

両親は思い悩んだ。

こんな症状は聞いたことがなかった。仮に病院に入院させたとしても、水萌を治すことはできないだろう。

水萌の両親は薬学を専門とする科学者だったため、それがよくわかっていたのだ。

だからこそ、自ら作り出した。娘に感情を——笑顔を取り戻すための薬を。

そして自分たちで作った薬——認可されていないその薬を、水萌に投与した。

想いの力は強いということか、両親の望みどおり水萌は感情を取り戻した。

愛らしい笑顔を浮かべて、両親にありがとうと言うかのように水萌は笑った。

だけど、思いもしなかった、とんでもなく危険な副作用が出てしまった。

それが、爆発性の物質が血管の周りに蓄積されてしまうというものであった。

その爆発の力は、アマサギさんたちが語ったとおり、原爆にも匹敵するほどの威力だと計算された。

それは計算上の数値判断でしかなかったものの、計算が正しいかの証明のために実際に爆発させてみるなんてことは、もちろんできはしなかった。

このことは、やがて国にも知られることとなる。

水萌の両親、そして薬を投与された水萌は危険と判断され、薬は廃棄を命じられた。

また、他の研究に関しても援助を打ち切られてしまう。

国は水萌の爆発の危険性を考慮し、国家を挙げての絶対的な保護を申し出た。

安全な場所に水萌を隔離して完全監視体制の中に置くというものだった。

両親はそれを拒否した。水萌にそんな束縛された人生を送らせたくはなかったからだ。

そして両親は水萌を連れて逃げ出した。

水萌がどうやって逃げおおせたのかはわからない。

でも、おそらく両親のほうは捕まって拘留されるか、もしくは殺されたに違いない。

水萌を逃がすために犠牲になったはずだからだ、そう氷室は言う。

その根拠は、水萌と両親が逃げ出す際に、氷室が研究していた記憶を操作する薬を水萌に投与することを求められたからだだった。

それによって、水萌は一旦睡眠状態に入る。次に目を覚ましたと

きには、両親のことも氷室のことも住んでいた家のことも完全に忘れていたはずだった。

親戚を頼るようになると、両親は眠った水萌の耳もとでその親戚のことを語り続けたのだろう。そうすることで、薬の影響を受けても消えないで残る記憶になりえると考えられた。

おそらく両親がおとりとなり、水萌ひとりを逃がした。

親戚のもとまで逃れられた水萌には、いかに国といえども簡単には手を出せなかった。

その後、氷室は水萌の両親の研究室に残っていた資料をもとに、研究を続けた。

そう、水萌を爆弾化させた、あの薬の研究を。

その薬の研究には、氷室はほとんど関与していなかった。ただ、薬の副作用を知り、研究対象として絶大な魅力を感じていた。

だから水萌が爆弾と化してしまったあとは、彼女の家に頻繁に足を運び、研究を盗もうとしていたらしい。

結局有効な資料が得られないうちに、水萌とその両親は家を捨てて逃げ去ってしまったのだけだ。

氷室は水萌の家を隅々まで調べた。廃棄処分にしたとはいえ、まったく痕跡がないはずはないと考えたのだ。

案の定、研究室内の雑多な資料の中に紛れて、あの薬に関する資料なども残っているのを発見した。

氷室はそれを持ち帰って研究を続けた。でも、どうしてもあの薬を作り出すことはできなかった。

研究を完成させるためには、もっと詳細な資料が必要だった。

水萌の家の研究室から持ち帰った資料だけでは抜けている部分がある。

多いことに気づいた氷室は、別の場所にまだ重要な資料が残っているに違いないと考えた。

水萌を監視していたのは、彼女の封印された記憶の奥に、氷室の知らない研究資料の記憶などもあるのではないかと、そう考えていたからだ。

そのために、スマイルプロジェクトの面々を派遣した。彼らは氷室が雇った用心棒だった。

氷室はもともと、研究の謝礼を多く受け取っていた。

水萌の両親が研究した成果の一部も自分の研究と称して国に報告、その謝礼を受けていたからだ。

そういった資金があったからこそ、研究を続け、SPたちを雇うこともできた。

SPを水萌のもとに派遣したとはいえ、爆発の危険性があるのはわかっていた。だからこそ、慎重に行動せざるを得なかった。

また、氷室自身はこの館から離れるわけにはいかなかった。薬の研究には、定期的な成分調整が必要だったからだ。

そこで、頃合いを見計らって水萌を故郷のこの村へと誘い出すことにしたのだという。

「ウチらを、どうするつもりなのだ？」

「そうですねえ、せつかくですから実験体になってももらいましょうかねえ」

ニヤリといやらしい笑みを浮かべる氷室。

「ともかく、あの地下室の資料によって、わしの研究もやっと完成させることができますはずです」

ひと呼吸置いてあたしたちを見回す。

そして今まで以上に歪んだ醜い表情をその顔に張りつけたまま、  
高らかな笑い声を発しながら宣言した。

「これで、人間を爆弾化させ、その爆発を自由に制御できる薬が、  
この世に誕生するのです！ ふおっふおっふおっ！」

「いや、それは無理だ」

突然、部屋の扉が乱暴に開けられ、声が響いた。

「な……なんだ!？」

アマサギさんが叫ぶ。

でもその叫びに答えることなく、部屋の中に入ってくる数名の黒いスーツを着た男たち。

最初に入ってきて声を発した男性は、おそらく氷室と同じくらいの年齢と思われる、茶色のスーツに身を包んだダンディな印象の紳士だった。

そしてその横には、同じくらいか少し年下だろうか、女性が寄り添うように立っていた。

「お前たちはっ……!」

立ち上がった氷室の表情が固まる。

あたしは思い出した。デパートの屋上で水萌を助けてくれた黒スーツの集団のことを。

水萌を助けてくれた人はあるとき、あたしが訊いた「SPの人たちですよ?」という問いかけに、「ああ」と肯定した。

つまり――。

「あなた方は、本当のSP……セキュリティポリスの方々なんですね!？」

あたしの声に答えてくれたのは、最初に部屋に入ってきた男性だった。

「うむ。そういうことになるな」

そして黒いスーツの男たちが身構える。  
その手に握られているのは――拳銃だ！  
素早く、アマサギさんやグレースーツの男たちも応戦の構えを取る。

あたしたちを縛りつけていたロープは、ようやく彼らの手から離された。

「君たちは外へ！」

黒スーツのひとりが叫ぶのと同時に、部屋にはグレースーツの男たちがさらになだれ込んできていた。

「くつ、ダメか！ 君たちはその辺に隠れていなさい！」

言い直した黒スーツの人は拳銃を構え、そして、撃つ。

あくまで威嚇のつもりなのだろう、天井付近を狙った銃弾はそのまま壁に穴を開けた。

あたしたちは言われたとおりに身を隠す。

置かれていたソファの陰に身を寄り添わせるようにして倒れ込んだ。

ロープをつかんでいた手が離されたとはいっても、あたしたちはまだ縛られたまま。自由に身動きできるわけではない。

今は黒スーツの人たちを信じて、状況を見守るしかなかった。

グレースーツの男たちも、何人かは銃で武装していた。氷室本人も、拳銃を机の中にも忍ばせてあったのだろうか、黒スーツに応戦している。

銃声が鳴り響く。

どちらも無闇に銃を撃ちまくるわけではなかった。

黒スーツはセキュリティポリスとはいえ、日本の国家機関。滅多なことでは銃の使用や、ましてや射殺までは許可されないのだろう。やむを得ない場合や身を護るために仕方なくという状況なら認められるのだろうけど、それでもなるべく穏便に事を済ませるように指示されていると考えられる。

一方のグレースーツたちの銃は裏のルートで調達したものだだろう。ここは奴らの本拠地、人数としては黒スーツよりも倍以上と多いものの、銃を持つ者はその一部。銃弾もそれほど多くはないと思われる。

威嚇しながら様子をうかがっている両陣営。

あたしたちの横には、最初に入ってきたダンディな男性とその横に寄り添っていた女性が身を屈めていた。

「安心して私たちに任せなさい。彼らは訓練されているからね、大丈夫だよ」

そう言いながらも、額に汗がにじんでいる男性。

冷や汗、だけではないかもしれない。実際に部屋の気温は急激に上昇している。

銃撃が窓ガラスも撃ち抜いたのだろう。割れた窓からは、蒸し暑い空気が流れ込んでいた。

時刻としてはおそらく夕方になっているはずなのに、じつとりと蒸し暑い嫌な風が、あたしたちを包み込む。

男性の言うとおり、確かに黒いスーツの彼らは訓練を受けた統率力も発揮し、グレースーツの男たちの持つ銃を狙うなどして状況を有利に導こうとしてはいる。

ただグレースーツの数は多く、それに加えてここは奴らの本拠地だ。いわば黒スーツにとっては、アウエーでの戦いになる。

やたらに銃を撃てない以上、飛びかかって取っ組み合いになることは必至だった。その優劣を考えるとグレースーツに分がある。

また、グレースーツには大柄な男が多かった。力負けしている感じだろうか、黒スーツたちが徐々に圧されてきているのはあたしにすらわかった。

このままじゃ、ヤバそう……。

こんな状況下だというのに、意外と冷静に、あたしはそう思った。

どうにか形勢を好転させないと……。

なんとか奴らの気を引くことが、できないだろうか。

あたしは考えていた。

でも、縛られているあたしたちには、できることなんて……。

口は使えるのだから、叫び声を上げるとか？

いや、だめだ。こんな状況の中じゃ、大した効果はないだろうし、もし上手く声を響かせたとしても、グレースーツだけでなく、黒スーツの人たちにも注目されてしまう。

どうにかしてグレースーツの男たちだけ注意を逸らすしかない。でも、そんなの、どうすれば……。

そのとき。

ドガッ！！

取っ組み合いになっていたのだろう、ひとりの黒スーツの男が飛ばされ、あたしたちが身を潜めていたソファ―に激しく音を立ててぶつかった。

ソファ―は倒れたりまではしなかったものの、その裏に隠れていたあたしたちにも衝撃を与える。

「ぐっ……」

土柳のうめき声が聞こえた。

彼は妹の地花ちゃんを護るように自分の身を挺していた。

「なんか、ヤバそうなのだ……」

フーミンもあたしたちのすぐそばに身を横たえていた。

ほぼ同じ視点から状況を見ていたのだろう、あたしと同様の感想を漏らす。

気づくと、あたしの真下には水萌がいた。

先ほどの衝撃で、あたしが水萌の上に乗っかる形になっていたようだ。すぐ目の前に、彼女の顔がある。

「熱希ちゃん、重い」

「こら水萌、重いなんて言うな！」

蒸し暑い空気のせいで、うっすらと汗が浮かんでいる水萌。少し

濡れた髪が彼女の額に張りついて、また熱気のせいかなのりと上気した頬には赤みが差し、ほどよい色っぽさを演出していた。

ああん、この子、やっぱり可愛い……。

って、そんな場合では……。

……と、そうか！

「水萌……」

あたしは小さく彼女の名前を呼びかけ、

水萌の唇に、自分の唇を重ねた。

「ん……」

一瞬、驚いて目を見開いた水萌だったが、すぐに目を閉じる。ドキドキと鼓動が高鳴る。あたしと同じように、水萌もドキドキしているのが、密着した肌から伝わってくる。

あたしは部屋に響く喧騒の中、水萌と激しくキスしていた。

「うあ……こんなときにまで……。さすがなのだ……」

フーミンのつぶやきが聞こえた。

なんか、これがいつもどおりのあたしたち、っていうふうに思っ  
てない？

違うのよ？ さすがに、ここまでしたのは初めてなのよ？

なんて反論している暇はない。あたしは縛られたままの体を激しく揺さぶりながら、キスし続ける。

暑い風が流れ込む現状、汗もたらだと流れる。そんなのはお構いなし。というより、それもあたしの考えのうちだ。

あたしたちがそんなことをしている中、戦いは混乱の度合いを増していた。

すでに銃弾も少なくなってきたのか、双方入り乱れての取っ組み合い、殴り合いが主になっている。

とはいえ、やはり多勢に無勢、黒スーツたちの消耗は激しかった。もう限界に近いかもしれない。

この様子では、援軍が期待できるわけでもないだろう。黒スーツたちにも、危機感が襲いかかっていた。

そこへ。

ビーツ！ ビーツ！ ビーツ！ ビーツ！ ビーツ！ ビーツ！

けたたましい警告音が鳴り響いた。

そう、水萌の腕に巻いてあった腕時計のアラームだ。

彼女は律儀に今日もそれを身に着けていた。

後ろ手に縛られているから、今は彼女の背中の下敷きになっている状態だけ。

血流量の増加と体温の上昇によって鳴るというアラーム。そのために、あたしは水萌とキスをして体温を上昇させようとした。

ドキドキして血液の流れも速くなるし、赤くなるのだから体温だつて上がるはず。ダメ押しで身をよじって、摩擦と密着によっても体温の上昇を図る。

そういう作戦だった。

あくまで作戦、だよ？ 決して自分の欲望のためとかじゃないよ？

……そりゃまあ、楽しかったのは確かだけど。

ともかく。

部屋中にアラームの音が鳴り響く。

「なんだ、この音は!？」

男たちは焦りの表情を浮かべながら、何事かと周囲を警戒する。もちろんそれは黒スーツたちも同様だったのだけど。

「ヤバいんじゃないか!？ 逃げないと、巻き込まれるぞ!」

「いや、しかし、今は……!」

アラームの警告する意味を知っているグレースーツたちのほうが、その音に過剰に反応し、より大きな焦りを生み出した。

その違いは、大きかった。

そしてそのチャンスを見逃す黒スーツたちではなかった。

ダッ!

素早く動き、戸惑っているグレースーツの男たちのみぞおちを殴る、腕を後ろに回してつかみ壁に押し当てる、首の後ろに手刀を打ち下ろす、拳銃で頭を殴る。

あらゆる手段で、グレースーツの男たちを圧倒していった。

バタバタと倒れていくグレースーツたち。

まさに、一瞬の出来事だった。

黒いスーツの男たちが、グレースーツの奴らやアマサギさん、シラサギさん、そして氷室を縛りつけていた。

彼らは観念したのだろう、すでに抵抗する素振りも見せなかった。

「ありがとう、君のおかげで助かったよ」

茶色のスーツのダンディな紳士が、あたしに声をかける。

「それと――」

ずっと優しい瞳を向けて、紳士はこう言葉を続けた。

「いつも水萌と仲よくしてくれて、ありがとう」

え？ あたしは思わずきょとんとした表情を向ける。

「私は水萌の父、沢湖飛沫<sup>しづき</sup>、こっちは妻の水季<sup>みずき</sup>だ」

「初めまして」

飛沫さんの紹介を受けて、ぺこりと温かそうな微笑みを浮かべながら会釈する水季さん。

その笑顔は、確かに水萌とそっくりだった。

「あつ、こ……こちらこそ、初めましてっ！」

慌てて頭を下げるあたし。

水萌のご両親との対面なんていう状況がいきなりやってくるもの

だから、あたしはもうパニックになっていた。

「お父さんとお母さん？」

水萌は首を微かにかしげながら、つぶやく。

「そうだ。薬のせいで覚えていないかもしれないし、正直水萌の前に姿を見せる資格なんてないと思っているがね」

飛沫さんは、バツが悪そうに頭を掻く。

「いいえ、覚えてるよ。でも私はずっと、死んでしまっている  
とばかり……」

「わしも、そう思っていましたよ。そうでなかったとしても、捕ま  
って拘束されているだろうと。それなのに、セキュリティポリスな  
んかと組んでここへ来るとは、いったいどういうことなんですか！  
？」

水萌の言葉を継ぐように、縛りつけられたままの氷室がそう叫ん  
だ。

「確かに私たちも、死を覚悟していた。幼い水萌を、たまたま止ま  
っていた貨物列車のわらの中に潜り込ませたあと、私たちは逃げた。  
しかし逃げきれずもなく、やはり捕まってしまった。だが、殺  
されたりはしなかった。拘束された、というのとも少し違うかもし  
れない。国の機関と協力して、研究をすることになったのだ。目的  
は、水萌を爆弾化した薬の効果を消し去る解除薬の開発……」

水萌にあんな副作用を引き起こしてしまった原因は、自分たちの  
作った薬にある。どうにかして治したいと考えていた。

だからこそ、飛沫さん水季さん夫妻は、国の申し出を受けた。

極秘の研究室でその開発は進められた。ただ、研究は難航した。家に置いてきたため、手もとに資料がなかったから、ではない。すべての条件は飛沫さんの頭の中に入っていたので、それは問題にならなかった。

もともと水萌の爆弾化は、副作用として想定外に出してしまった効果。おそらくはまったく予定していなかった偶然の要因があったに違いない。

それを調べるためには実際に使った薬の成分を探るしかなかったのだけど、薬はすでに廃棄処分してしまったあとだった。

仮にその薬を投与した水萌の体を調べても、微量と思われる想定外の成分までは検出できないだろう。

そうはいっても、研究は続けなければならない。一刻も早く水萌を治療し、危険を排除しなければならぬからだ。

その水萌は、最後に植えつけられた記憶を頼りに、親戚の家までたどり着いていた。

親戚の家には両親から手紙を送ってあったらしい。水萌を頼みます、と。

水萌が親戚の家に無事に着いたことを知った両親は、養育費を用意して再び親戚に手紙を送った。極秘の研究だったため、住所や連絡先は書けなかった。

また、自分たちの薬によって水萌の人生を狂わせてしまった、と思いつめていた飛沫さんは、姿を現す資格なんてないと考えていた。そのため、自分たちは死んだと伝えてほしいと親戚への手紙に書いていた。

水萌の存在は危険ではある。でも、ひとりの人権を完全に無視し

て捕らえてしまえるほど、国も非道ではなかった。

幸い、悲しみや苦しみといった感情がかなり多く蓄積されない限りは、爆発なんてしないことはわかっていた。

だから、監視を続ける必要こそあったものの、水萌はそのまま親戚の家で平穩に暮らすことができていたのだ。

「そう、だったんですか」

あたしは、それだけ声に出すのがやっとだった。

「私たちの研究仲間だった氷室。彼のことは、できればそつとしておいてやってほしいと、国にずつとそう言い続けていたんだ。しかし今回、どうやら氷室がとんでもない計画を立てているとの情報を得た。それで国も動くことになった。それを知った私は研究も手につかなくなり、ともにここへ来ることを志願したんだ」

氷室は、水萌の爆弾化のことを知っている数少ない人間だった。

そして優秀な科学者でもある。

でも、野心が強すぎた。

国からの資金援助も受けながら、様々な研究を続けてはいたものの、誰にでもスランプはあるもので、いつしか思うような成果が上がりなくなってきたらしい。

飛沫さんたちの残した研究を応用して得た成果も自分の功績として発表していた氷室。その基本研究のストックがなくなったのかもしれない。

ともかく、成果が上がりなければ資金も減らされる。資金が減れば研究の規模も小さくなっていき、さらに成果は上がらなくなる。

そんな状況が続いていた氷室に、資金援助を打ち切るとの知らせ

が届いた。

氷室は怒りをあらわにした。もちろん、それでどうなるものでもない。

実際のところ、氷室はそれまでにかなりのお金を蓄えていた。だから、資金援助がなくなつたところで研究ができなくなるといったことはないはずだった。

国としても、それを見越しての決定だったと考えられる。

とはいえ、今まで援助を受けていたのにそれが突然なくなるといふのは、氷室にしてみれば許しがたい仕打ちだと思つただろう。

そして、水萌が爆弾化した薬を使うことを思いついたのだ。

あれを研究・改良して、人間を自在に爆弾化してコントロールできるようになれば、国を脅して資金援助を受けられる。

いや、そんなものが開発できれば、脅さなくても援助してもらえるかもしれない。人道的な部分での問題はあにしても、兵器としては魅力的なものになるはずだからだ。

ただ、危険だということと闇に葬られる可能性もあつた。そう考えると、交渉で優位に立てる切り札を持つておくのは、悪くないだろう。

研究資金もそれほど多く残っているわけではない。すでに爆弾と化した水萌が存在しているのだから、とりあえずは彼女の爆発をコントロールできる方法さえ開発できればいい、氷室はそう考えた。

そして飛沫さんの家を搜索するも、有効な資料は得られず。

その後は、さつき氷室自身が語つたとおり、消し去つた水萌の記憶に望みをかけて今回の作戦を実行した。

そついうことだった。

「こんな危険な奴、最初から処分してしまえばよかったのだ」

フーミンがきつい口調で言う。

確かに、そうだ。いくら研究仲間だったといっても、成果も援助金も横取りしたような人間を庇い立てする必要なんてないように思えた。

「そう言わないでくれ。私たちのつき合いは長いのだから。氷室には昔、美しい妻がいた。とてもよくできた人だったよ。氷室とも本当に仲がよくてね。幸せそうだった。しかし――」

いつしか病気がちになり、やがては床に伏してしまった。

彼女をどうにか助けたい。その思いから、氷室は様々な分野の薬学研究に手を出し始めたのだ。そしてそれを、飛沫さんたちも手伝った。

ただ、研究のかいもなく、氷室の妻は息を引き取った。

それからの氷室は、それはひどい状態だったようだ。酒におぼれ、すべてを忘れ去ろうとした。でも、酒の力では一時的に忘れることしかできない。

だからこそ、記憶を操作する薬の研究を始めた。悲しみと苦しみから逃れたい一心で、自分の脳から妻の記憶を消し去るために。

飛沫さんや水季さんは反対した。忘れてはダメ、覚えていてあげなければ、と。

でもすでに研究に没頭していた氷室の耳に、その声が届くことはなかった。

研究にのめり込むことで、苦しみから逃れるかのように。

「それにな、もっと別の理由もあったんだ。それは、彼の娘と、そ

して私たちの息子のことだ」

飛沫さんは独白を続ける。

スマイルプロジェクトだと名乗り、あたしたちに接近してきた男性、アマサギさん。

彼は、飛沫さんの息子、つまり水萌の兄だった。

そうか、だから最初にあの公園でアマサギさんを見たとき、トロい人だと感じたのか！

水萌と同じ遺伝子レベルのトロさを持っている人だから、そう思ったのね！

「……熱希ちゃん、それ、ちょっとひどいかもぉ」

水萌がのんびりとした声を上げて口を尖らせていたけど、それは無視で。

一方、シラサギと名乗った女性のほうは、氷室の実の娘だった。

氷室の記憶操作研究がある程度の成果を収めた頃、国はその研究内容に興味を持ち始めた。

とはいえ、やはり危険と判断されてしまったため、氷室は研究の中止を求められた。

そのあたりは、さっきの氷室の話にもあったとおりだ。でも、この頃氷室が飛沫さんたちの家に入り浸っていたのは、実は研究のためだけではなかった。

それは、アマサギさん——本名は水鳥みづとりというらしい——と、シラサギさん——こちらは本名も白鷺okohirikoだった——がいたからだ。

研究に没頭する氷室は、ひとり娘である白鷺さんのこともほとん

ど構うことがなかった。

そのため、飛沫さんの家で同い年の水鳥さんと遊ばせたり、水季さんがふたりまとめて面倒を見たりしていた。

そんな中、記憶操作の研究で目をつけられた。もしかしたら子供たちに危険が及ぶかもしれない、そう考えた飛沫さんたちは、やむなく子供たちを氷室邸に匿うことにした。

氷室も記憶操作研究からは手を引き、細々と研究するという名目で自宅に戻った。子供たちの面倒をしっかりと見ることを約束させられて。

この頃の氷室は、落ち着きを取り戻していた。だからこそ飛沫さんたちは、彼を信じたのだ。古くからの友人である彼を。

このときには、水萌が水季さんの体内に宿っていた。そして生まれてきた水萌に感情がないことがわかり、飛沫さんたちはあの薬を作った。

その研究に氷室が関わっていなかったのは、彼が言われたとおり、自宅に戻ってふたりの子供の世話をしながら細々とした研究をしていたからだ。

そして水萌は投与した薬により感情が戻り、それと引き換えに爆弾化してしまった。

「俺は……この家の息子ではなかったのか……」

アマサギさん——いや、水鳥さんがつぶやく。

「やはり、記憶操作の研究は続けていたようだな。それで、私の息子である水鳥を実験体にした……」

「そうですよ。面倒は見えていたんです、文句はないでしょう?」

「……言い返したいところではあるが、私にはそんな資格もないだ

ろくな  
」

これで、すべてだ。飛沫さんは、そう言って締めくくった。

その表情は、すべてを語り終えてすっきりしたというよりも、すべての罪を言葉にして再び噛みしめ、苦しそうな様子でいっぱいだった。

すっ……。

苦々しい表情をしている飛沫さんと、その横に寄り添う水季さんの目の前に――、

水萌が、そつと立つ。

「お父さん、お母さん……」

にこおっつ。

彼女の表情は、これ以上ないくらいに優しい微笑みだった。

「……水萌、こんな私たちを、お父さんお母さんと呼んでくれるのか……」

「当たり前だよっ。私のお父さんとお母さんは、ひとりずつしかないんだから」

にこにこにこ。

水萌ったら、両親に会えて本当に嬉しそう。

水季さんは涙を流していた。それほど、水萌の言葉が嬉しかったのだろう。

飛沫さんも一瞬その相好を崩す。でも、すぐにもとの苦い表情に戻った。

「水萌……。すまない、まだ解除薬は完成していないんだ。本来ならば、完成するまで水萌の前に姿を見せるつもりはなかったのだが……」

「そんなの関係ないよっ。私は、お父さんお母さんと一緒にいた

いのゝ」

そう言っつて両親に抱きつく水萌。

水萌に抱きつかれ、嬉しそうではあったけど、飛沫さんはそれでもそれを振り払うかのような言葉を続ける。

「しかしだな、私はお前をそんな体にしてしまった。親として失格なんだ。だからせめてもの罪滅ぼしとして、しっかりと解除薬を完成させる。それまでは、お前の親としての権利を持つ資格なんて……」

そんな飛沫さんの寂しげな主張を、水萌は遮る。

「私は寂しかったわゝ。このお守りをいつも握って、寂しいのを我慢していたのよゝ」

水萌の手には、薄汚れた巾着袋が握られていた。いつも大切に持っていた、あの巾着袋だ。

その口は開かれ、中からは袋と同様に薄汚れたお守りが、静かにその姿をさらしていた。

「私を逃がしてくれたとき、これを私たちだと思って持っているんだよって、そう言っただじゃないゝ。なんとなくだけど、覚えてるんだよゝ。罪滅ぼしならゝ、これからはずっと一緒にいてほしいのゝ。お願いゝ」

水萌は両手を顔の前で組んで懇願する。彼女の目にも、キラキラと輝く雫が溢れていた。

「……こんな私たちを、お前は許してくれるのか……？」

「許すもなにも、今の私がこうして笑ったり泣いたりできるのは、お父さんお母さんのおかげだもの。ほんとに、ありがとう」

笑顔のまま、涙をボロボロと流し続ける水萌を、飛沫さんと水季さんは、ぎゅっと抱きしめた。

「今まで寂しい思いをさせてすまなかった」

「これから、ずっと一緒よ」

「うん」！

水萌の明るい歓喜の声が、部屋の中に響き渡る。

周りで成り行きを見守っていたあたしたちも、もらい涙で瞳を濡らしていた。

氷室やその手下であるグレースーツの男たち、そして水鳥さんと白鷺さんも、ロープで縛られて黒いスーツの男たちに連行されていた。

「彼らは、どうなるんですか？」

「とりあえずは国のほうで拘留するだろう。拳銃の所持などもあったから絶対とは言えないけど、氷室以外はそれほど重い罪にはならないんじゃないかな。あまり遠くないうちに解放されると思うよ。その後どうするかは、彼ら次第といったところかな」

「でも、水鳥と白鷺ちゃんは、うちで引き取るつもりよ」

あたしの問いに、飛沫さん水季さん夫妻が仲よく答えてくれた。

すぐにといいわけにはいかないけど、なるべく早めに新しい家を  
用意し、ふたりは水萌と一緒に住むつもりのようなのだ。

その資金は国側に申請するらしい。

地下に研究室を作り、そこで研究を続けるという名目で願い出れ  
ば、今回の働きもあるし認めてもらえるはずだ、そう飛沫さんは語  
った。

あたしとしては、とても複雑だった。

水萌が両親と一緒に住める。それは祝福すべきことだ。おめでと  
う、水萌、そう言いたいくらいだ。

でも……。

彼女が引越してしまう。それはあたしには耐えられなかった。  
水萌のいない生活なんて、あたしには考えられない。

そう涙目で訴えるあたしに、水萌の両親は優しい微笑みを向けて  
くれた。

「わかってるよ。水萌にとっても君の存在は特別だと思うからね。  
そんなふたりを引き裂くなんてことはしないさ」

そう言って飛沫さんはウィンクしてくれた。

それから一カ月後、夏休みが終わる頃には、急ピッチで建てられ  
た水萌の新しい家が、あたしの家のすぐ隣にあった空き地に完成し  
ていた。

親戚の叔父さん叔母さんは、水萌が出ていくのを寂しく思ったみたいだけど、本当の両親と一緒にいたいだろうと、快く認めてくれた。

水萌の新しい家が建てられた土地は空き地だった。土地の持ち主と交渉し、国が買い取ったらしい。

その場所は駐車場にでもしようと考えていたようで、結構な広さがあった。

そのため、新しい水萌の家は驚くほどの豪邸となった。

「すごいのだすごいのだ。家の中でかけっこができるくらいなのだ！」

フーミンもはしゃいでいた。

「わあ、ほんとにすごいでございすですね。広いだけでなく、短い期間で建築されたはずでございすのに、とてもしっかりした造りになっておりますし、調度品なども含めてとても優雅な雰囲気をかもし出しておりますでございす」

地花ちゃんも、相変わらず中学生とは思えない感想を漏らしていた。

「ほんとにすごいな。しかも、いつでも泊まりに来ていいなんて言ってもらえるなんて。お客様用の部屋も、全部でいくつあるって言うってたっけ？」

土柳も目を見開いて水萌の家を見上げていた。

「七部屋くらいはあるって言ってたのだ」

「まあ、いくら部屋の数が多くても、土柳が水萌の家に泊まるなんてこのあたしが許さないけどね」

「うあ、ひどい！ やっぱ俺だけ、のけ者なのか？」

「そんなの当たり前でしょ？ 土柳だし」

「ひどい……。やっぱ炎壁は鬼ババだ！」

「なんとでも言ってなさい！」

「うふふ、みんな、いつもどおりでとっても楽しいわあ」

あたしたちのやり取りを、水萌は温かな笑顔を浮かべて見つめている。

彼女は今も爆弾娘のままだ。

解除薬の研究は急いで進める予定だけど、それでもまだまだ時間がかかるはずだと、飛沫さんにも言われていた。

だからこれからも、水萌のことをよろしく頼むよ。

そうお願いされたあたしたち。

もちろん言われるまでもない。

あたしの大切な大切な親友である水萌。

彼女が笑顔でいられるように、あたしたちはいつでも一緒にいて、ともに楽しい時間を過ごしていくのだ。

これからも、ずっと。

「でも、ほんと幸せそう」

ずっつとニコニコしている水萌を見て、あたしはポツリとつぶやく。

「うん、幸せだよ」

にこおっ！

彼女は明るい笑顔をいつぱいに咲かせていた。

あゝん、やっぱり可愛いわ。

それにしても、ほんとに幸せそうだ。

あたしとしても、水萌とお隣さんになれて今まで以上に水萌と一緒ににいられるのだから、とても幸せだった。

「こないだのことで、よりいっそう仲を深めた感じなのだ。もう誰にもふたりの仲を引き裂くことなんてできないのだよ」

フーミンが呆れ顔で見ていたけど、もちろんそんなの気にするあたしたちではなかった。

毎日あたしは水萌の家に行き、一日のうちのなるべく多くの時間をともに過ごす。

彼女の温かい笑顔を見て、あたしも幸せな気分になる。

もちろん水萌も、そんな心からの笑顔を見せてくれるのだから、幸せに感じているはずだ。

爆発の危険があるのは確かだろうけど、その可能性は低いと思う。だって、水萌にはあたしが、そして他にも頼もしい仲間たちがついているのだから。

彼女が悲しみや苦しみに沈むことなんて、ありえない。

いや、あたしが絶対にそんなことはさせない。

水萌は、あたしが護る！

あたしは改めて、そう決意を固めていた。

「うふふ、これからよろしくね、熱希ちゃん！」

「もちろんよ、水萌！こちらこそ、これからよろしく！」

「あ、やっぱりいつもどおりなのだ」

「いつもどおりだな」

「いつもどおりなのでございますね」

暖かい日差しと、仲間たちの生温かい視線の中、今日もあたしと水萌は両手を強く握って見つめ合っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3342y/>

---

スマイルプロジェクト ～その笑顔、国家機密につき～

2011年11月13日21時06分発行